
「8月32日」 覚醒編 ~ 封印編

九郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「8月32日」 覚醒編 〱 封印編

【Nコード】

N2826Z

【作者名】

九郎

【あらすじ】

あの紙切れに書かれていたこと・・・

報われない30代のささやかな願いは叶えられるのか。

「8月32日」 覚醒編 前篇（前書き）

現代に戻ってきた晃。

日々ストレスを抱えながら生きる術を探すも世間の風は冷たい。
そんな晃に未来はあるのか・・・

「8月32日」 覚醒編 前篇

「8月32日」第2部

まずは簡単な自己紹介から始めたいと思ったが、前作とあまり変わらないので省略する。

ただ多少の変化はあったよ。とはいってもあの出来事は現実だったのか・・・しばらくは頭から離れなかったけど。

でも日を重ねるうちにだんだんと夢の中の出来事だったのかも、なんて思うようになったりもしたが

そのたびに例の紙切れを見ると待ち遠しくなる自分がいる。

しかし現実問題としてこの時代で生きていくことを運命づけられている俺は働くことを選んだ。

つぎ、さおりんに会う時は恥ずかしくない男になっていたから・・・求愛行動ってやつかな？

そんなわけでアルバイトを始めました。なぜアルバイトかって？社員の応募はすべて断られたよ。

約2年ぶりに仕事に就いたわけだが精神的リハビリよりもむしろ肉体的なりハビリが必要だと実感した。

仕事は老人ホームでの介護です。

20代の時に保険のつもりでホームヘルパーの2級を取得していたんだが、これが役にたった。

まあ、時代が必要としているせいもあったね。

そんなこんなで朝7時には出勤です。

通勤手段はもちろんバイク！ 原付だけど・・・

前作であれだけ吠えていたくせに・・・このような意見は現在受

け付けておりません、あしからず。

30代の迷いってやつだよ、勘弁してください。

職場に着くと朝礼を済ましてすぐに入居者の食事の準備が始まる。

60人ほどの入居者の名前と簡単な病歴を覚えるのはつらい・・・

やはりなんでもかんでも20代だったな、ちよつとの後悔がある。

しかしそんな事はいつておれず似合わないエプロンをかけると、ひらがなバッジをつけ、準備完了！

お偉い社員さんの指示に従いテンポよく食事を席へ運ぶ。

「松本さん、さんとゝの食事介助おねがいします」

「はい」

食事介助・・・

ただ見ているわけではないよ。テーブルについている3人から5人の食事介助をする。

基本は完食させること。なかにはスプーンでさえ持てない方もいるからね。

では汁物から・・・とんでもない！

特に認知症の進んでいる方は大変。食器を投げたり手づかみで食べだしたりするから、とにかく隙をみせるとのど詰まらしたりなんかしてさ、顔が真っ赤になっていくんだよ。そういう時はあわてて社員さん呼んで対処していただく。さすがに手慣れたもんだ、詰まった物を取り出すとすぐに持ち場に戻る。

朝の食事だけで1日働いた気分になるよ。

休む間もなく着替えと下の世話。

おむつ替えは1人平均5分で終わらせる。でないと時間内で終わ

れない。まあ半月もすればこなせるようにはなるよ、ただ現状を知らない方にひとつ経験談を。

入居者はその多くが意思の疎通を持ってない。はいはいはなし言葉がうまく話せない、または聞き取れない。

最初の頃は噛みつかれたりモノ投げられたりしたよ。オムツ替えの時なんかは特に気を使っているんだけど、なかなか汲み取ってくれない。

ある日、下の世話をしていると、とても嫌がる方がいた。

しかし時間というノルマがある新人の俺には対処のしようが無くオムツを外しにかかった。

嫌がる理由がそこにはあった。

体調が優れなかったのだろう、食あたりかもしれない。それらが洪水のように溢れていた・・・

バケツ3つ取り替えて・・・終わった時には社員さんの罵声が飛んできたよ。ひどい話だろう!?

その社員さんは新人で俺よりも10歳下の女性だよ。

彼女もまだ慣れていなくてストレスが溜まっていたんだろうね。説明する間もなく入浴場に連れて行かれると順番待ちの方を3名ずつ世話していく。

呼吸確保しつつ洗髪し、体を洗い男性なら髭を剃ったりもする。それを終わると機械式の湯船であたため終了。

やはり1人5分ほど。すべて終わると黒い塊なんか落ちていく、よく見る光景だ。さつさと掃除しろ、といわんばかりに車いでコズかれる。

なんだろうね、これ。この実態を政府が変えない限りこの国の老人

ホーム産業は廃業だよ、まったく。

人材不足だからって素人募集して、素人が教育という名の権力を振りかざす……。世も末だね！

そんなわけで、一か月で辞めました。と、ここで意見が分かれる。

1つは良くやったよ。2つ目は根性なし。

今回、中間の意見でありそうな「なんで相談しなかったの？」は省きます。前にも言ったが上からモノ言われるのと我慢しないタチだつて……。ね！

まだまだ現状を報告したかったのですが、希望を胸にこれから働こうとしている方に申し訳ないのでこのあたりでやめておきます。

でも国や県が直接運営している所は素晴らしかった。働いている人も余裕があつたね。それを支えている豊富な知識や洞察力……。ただ遠くて通勤に嫌気がさして1週間で辞めさせて頂きました。後悔先に立たずだよ。

2つ以上採用をいただいた時は近場で働こうなんて考えるもんじやないよ。しっかり調べてからね！ あたりまえだけど。

結局、年を越してしまつたよ。

ひどい1年だった……。まあたいして毎年変わらないんだけどね！今年こそいい年になるだろうって思っていたのさ、共感できるだろうか？
できない奴は恵まれてんだよ。

多少の癖みが入ったところで前回の胃の検査報告をしておかなければいけないね。

人生初めての胃カメラ……。オエツつてなつたよ。

先生が「落ち着いたら画面見てください、見ながら説明します」なんて言つたけど、とてもそんな状況じゃない。でも4、5回オエ

ツつてなつたらだいぶ落ち着いてきた。

涙目で頑張つて画面を見ると、以外にも綺麗なピンク色でした。胃の中は薄つすら赤くはれている箇所があつてさらに下には鳥肌のような状態ができていた。

「もう少し奥まで見てみましょうね」いいながら15センチほど差し込んだよ。

麻酔しているとはいえ臓器に当たる感触はなんとも言えない。

「この辺りが十二指腸ですね」このあたりとはどのあたりか分かんなかったが狭い臓器がそうなのだろう。

「あれ？」

あれっ？ その発音つてすべての人を不幸にするよ、先生！

それでも無事に終了しました。

診察室に戻ると先生が写真を数枚ひろげた。とくに問題はなかったようだ。

いろいろと詳しく説明していただいてホッと一安心したところで「松本さん、確認のため血液検査をしておきましょうね」のひとこと。

確認？ なんの？

どうやら胃の方にはとくに問題なかったらしいが、奥の方に気になる箇所があつたらしい・・・

そう言われたら断るはずはない・・・苦手な注射を学生するときに来だったかな？ 我慢して受けたよ。

検査結果は一週間後だつて。

そんで一週間後・・・

とくに問題ありませんでした、以上！

だけど1年に1度の診察を受けてください、と優しい言葉で書かれていた。

2月22日。

俺の誕生日だ。34歳。まいった・・・確実に年をとっている。10代のころは30代って聞いたら若いオッサンのイメージしかなかったような、そんな年になってしまったのか・・・俺。

3月に入ってようやく重い腰を上げた。

ようやく就職できました！ 営業の御仕事です。はやい話が飛び込み営業です。

とはいっても現実に年収1千万を楽に超えている人も数人いる。やる気が湧いてきたよ！

ひと月だけは25万の給料が保障されるんだけど、2ヶ月目からは完全歩合制。だから1か月でみっちりしごかれる。

例のごとく原チャで出勤！ 朝9時。

朝礼から始まり今日の目標を怒鳴り声で叫ぶ！ こうしないとやる気がないと判断され何回もやらされる。

最初の頃は10回過ぎたあたりで（何やってんだ俺は・・・）なんて思ってたやめて帰ろうかと思ってたぐらいさ。

スパルタ教育ってやつだよ。でも2週間目まではがんばった。未経験の世界だし、俺にも営業の才能があるかもなんて思っていた。

夕方6時に支店に戻ると成績発表です。もちろん契約の可能性の無い帰宅者にはロールプレイングという深夜まで続く教育という名のしごきが待っている。でもそれで契約とれるのであれば文句は無い。しかしそんな現実はあるさり叩きのめされたよ。たまたま飛び込んだ家が悪かったのかな。

月曜の10時ごろだったかな、緊張しながらチャイムを押しても誰も出ない。しかし会社のルールでは最低3回は押せ、それでも出なければドアを叩け、それでもだめなら裏口から回れ、そういう教

育をつけていた。

3回目でようやく眠そうな声の主人が出た。俺は叩き込まれた内容を順に説明したが、途中で怒鳴りつけられた。

「そんなんで起こすな、バカヤロー！」てな具合に。

謝罪してパンフレットだけでも、とポストに入れようとしたら「テメーふざけてんじゃねえぞ！」カメラ付きのインターホンだから見えるんだよ。俺は見えないけど・・・

なんとか謝って隣の家に向かうんだけどインターホン切らないで聞き耳立ててんだよね・・・

その場を離れたかったけど逃げるのもシヤクだから順にしっかりとこなしたよ。

今でもその家覚えているよ。

その日からインターホン押すのが怖くなってさ、結局ひと月でやめようって思った。

その他にも嫌な人は多くいたよ。

結局人間という生き物は無駄に欲だけ持ち合わせたわがままで脳の使い方を知らない生き物だつてこと。

そんなわけで残りの一週間は公園で時間つぶしたり、パンフレットだけ配ったりしてた。

「松本君、今月契約とれなかったけど、支店が声かけてくれてるから明日からそつちにいってくれる？」

「店長、申し訳ないのですが私には向いてないようですので、できれば退職させて頂きたいのですが」

「そう、わかった。残念だけど仕方ないね、上には伝えておくから」

「はい、いろいろお世話になりました」

「はい、ごくろうさまでした」

同僚にこう言われるからこう答えて辞めればいい、という指導も受

けていたよ。

なんというか、あっさりしているね。おかげで人間不信になったよ。

でも給料はしつかり出たよ。こんなにありがたみのある給料は初めてだった。

俺みたいに能力の無いやつは今後、どう生きていけばいいのかわからなくなったよ。

人生ってこんなものか？ 努力の仕方も分からなければ結果もついてこない。

いくつか本を読んでも都合の良いことしか書いていない。おまけにまた胃の調子もおかしくなってきた。

根本的な原因は何だろうか？ そればかり考えると、いつも行き着くところは幼少時代だ。

一番大事な時期、俺のやりたいことは全てといっても決して過言ではないだろう、否定されてきた。

世間体の良い親の望む子になってほしい、たとえばテレビはNHK以外は悪だから（サザエさんは唯一許されていた）・・・など、数え上げたら嫌になってくる。

4月に入ると再び向精神薬と胃薬のお世話になる生活がはじまった。

結局、一生報われない類の人間なんだろうね・・・。

5月に入ると世間はゴールデンウィークの賑やかさが街を彩る。

俺は気分転換にクロスバイクで遠出することにした。思い出づくりという意味合いもある。

ゴールデンウィーク最終日5日。

朝9時に家を出ると荒川の土手を目指した。30分ほどで土手まで来るとようやく信号のないサイクリングコースに出たよ。

しかし最終日ともあって公園では野球の試合やプラスバンドの練習、ヘリのラジコンに熱中するものからマラソン大会など……さまざまな催しが執り行われていた。

そんな光景を左に見ながら走っていると看板が見えた。

「河口まで27キロ」

ん！？ その程度で東京湾に出るのか？ さっそく頭の中で計算が始まった。

現在午前10時を少し回ったところだ。昼には着くだろう。

ちよつと目標ができて漕ぐ足に力が入る。

「行つてやるうじやないの！」

甘かったね……足がついていけないんだよ、トイレ休憩を兼ねて10分休む。

正直、帰ろうか迷ったよ、でも迷いはすぐになくなった。

子供達5人を引き連れて同じく東京湾を目指すグループが休憩に立ち寄ったんだ。

「はい！ ここでトイレ休憩です、10分後に出発しますよ」

俺はこのグループにだけは負けない自信が出てきた。

颯爽と走り出すと前を走る競輪選手らしき人に付いて行つた。

5分と持たなかったよ……彼ははるか先の土手を上り終わると下つていった。

「反則だよ、原チャと変わらないじゃん……にしてもいいケツしてんな」

いったん路肩に止めるとサドルをハンドルの高さに合わせてた。

「これなら力が入るだろ！」

意気揚々と走り出すと前を走る競輪選手らしき人に付いて行った。

5分と持たなかったよ・・・モノが違うんだね。

あきらめてマイペースで行くことにした。

気づけば11時30だ。それにさっきからちらほら見えるあれはスカイツリーではないのか？ 潮の香りも増してきた。

間違いない！ 急に元気を取り戻した俺は目標をスカイツリーに変更した。

30分と経たないうちにその高さを実感したよ。

近くの土手を上がるとほぼ全貌が姿を現した。さすがに高い・・・思わず写メを撮る。ついでにGPSで距離を確認する。

「河口までもう少しだな・・・」

再び目標変更。

東京湾を目指して走ること30分。ようやく河口までの距離が1桁を切った。

残り7キロ・・・5キロ・・・

到着した俺は大きく深呼吸したよ。

なんだか無性にうれしかった。パイプの柵に肘をつきながら遠くに見える観覧車を見つめた。

おおきな輸送船が脇から現れると携帯を取り出してさっそくシャッターを押す。最大望遠にしたけど形を捉えるので精一杯だった。この距離はデジカメが必要だね。

感傷に浸っていると急にハラが減ってきた。持参した飲み物も空だ

し、近くに店は無い・・・

よし、次はスカイツリーだ！ その前に腹ごしらえ。

来た道を戻りながら土手に上がって店を探すことにした。

20分ほど走ると土手に平行して走る電車を見つけた俺は自転車を担いで土手を上がり店を探した。

さっそくラーメン屋があったが、店の前にはロードレーサーが並んでいる。

別の店を探すこと5分、繁華街でラーメン屋を見つけた。

「味噌ラーメン、お願いします」

「ありがとうございます」

さっそく来ました、味噌ラーメン！

外食するのはいつ以来だろうか？ それは期待を裏切らなかったね！

「本日、サービスで提供しています」

運ばれてきたのは3個の餃子だった。

「いいんですか？」

「はい、どうぞー！」

ここで食べた記憶は間違いなく残るよ。とにかくうまかった！

ハラも満たしたことで再びGPSで確認する。

「どうするか・・・」

俺は土手を走っていた。スカイツリーは次回の楽しみにとっておくことにしたよ。

そうそう飲み物を自販機で2本買っておいだ。まめに水分補給をしないとバテるよ。

帰りはペースを変えずにひたすら漕いだよ。

息が上がるとちよっと休憩、40分ノンストップで走っていた。整備された道でないところはいいかないよね。

再び走り出す。

この時間は競輪選手風の走る姿が目立つ。

次々に追い越されていくよ。

そうだ、選手とレプリカ君の違いを覚えておいてあげるよ！

- 1、追い越すときは2メートル以上の間隔をあける。
 - 2、あまり脇見をしない。
 - 3、とにかくペースを乱さない・・・とにかくはやい！
- 以上が本物。

次にあげるのはレプリカ君。

- 1、やたら寄せる。自慢げに自転車を見てもらいたいという願望。
- 2、追い越すときに少しペースを合わせる。相手の自転車を見下す。
- 3、ジロジロみながらニヤついて走って行く。
- 4、2人以上で走っている。

とまあ、こんなところかな。一言で片づけるならオーラがあるかないか。

素人でも足見ればわかるよね。まあ、個人的な意見だから気にしないでくれ。

ようやく帰宅すると3時30分を回っている。

足はガタガタだよ。無茶したのは自分でもわかる。明日は歩けないだろう……

プチひきこもり生活送ること3ヶ月。気がつけば半袖、短パン。

その日は再び痛み出した胃の検査を受けるべく病院に向かった。再びの胃カメラ。

2度目とはいえ、やはりオエツってなる。そこで血液検査。

検査結果は胃炎でした。かなり荒れているらしく麻酔薬を含む薬を薬局で出された。

それから3日後、病院から連絡があった。どうやら胃の下あたりに何かあるらしく精密検査が必要とのこと。

都内の病院を紹介されたよ。最悪の事態なんだろうね、きっと。

まあしかし、たいした希望も楽しみも無いし……あまり動揺しなかったな。

次の週の月曜日。不安に駆られながら支度を整えると家を出た。

8月15日 午後2時。

地下鉄を降りて地上に出る階段をあがる。電気の熱で発せられる独特の匂いが押し上げてくると地上から降りてくる喧騒の匂いが入りまじる。

久しぶりの都会に足を踏み入れると社会人にもなった気がする。見上げるほどのビルが立ち並び格差を目の当たりにすると、とたんに自分の立場を再確認する。

すれ違う人たちは決めたスーツを着こなしている。若いころはス

「ッで仕事に向かう人を見てつまらない人だな、などと思っていたがいまや憧れの対象になっっているとは・・・」

病院は駅から10分ほどでついた。

やはり見上げるほどの高さだ。

病院の自動ドアが開くと薬の匂いが鼻を突く。これは全国共通らしい・・・

案内板を見て内科を探すと、3階に大きく書かれていた。

近くに階段を見つけ3階に向かう。左右の手すりはリハビリをしている方が使っているので真ん中を失礼する。

3階の広いロビーにはすでに多くの患者が順番を待っている。傍らには健康講座のビデオが流れているがあまり見ている人はいない。

受付を済ませてその講座の前に座る。ガンについての内容だ・・・タバコはガンになりやすい、飲み過ぎる酒も同様、睡眠不足、それらにたいして過剰なストレスが長い間かかると健康な人でもガンになる。要はストレスがすべての根源だということらしいが、これは事実だろう。

「松本さくん、松本あきらさくん」

館内放送で呼ばれると指定されたドアへと進む。軽く緊張しながらドアに入る。

「松本さん？」

「はい、よろしくお願ひします」

「どうぞ、お座りください」

「失礼します」どこぞの面接よりも緊張してきた。

血液検査、レントゲンなど一通り済ますと診察室へ戻った。

「では来週の月曜日に来てください、そのときに結果を説明しま

す

「はい、わかりました……」どうやら今日は検査だけだったよ
うだ。

「来週まで待つのか……長いな」

ロビーのソファに腰かけて会計を待つあいだ、健康講座のビデオ
を見ていた。

出入り口の自動ドアが開くたびに都会の匂いで鼻をいやす。思わ
ず深呼吸したよ、なんかいい気分だ……

地下鉄の入り口まで来るとビルを見上げ都会の空気を吸い込み電熱
の世界に入ってしまった。

やはり運動不足だ……階段を何気なく降りてもふくらはぎが張
る。年のせいもあるだろうか？

これだけの階段を降りる機会は俺の人生の中でもあまりない。あ
るとすれば高校の修学旅行で京都に行ったときくらいだ。空気や景
色は違うが……

角張ったコンクリートの螺旋階段を下りて行く。が、こんなに下り
るものか？ 初めて来たとはいえ確か4階くらいだったような気が
する。

もう1階ほど下りたころだった。電熱の匂いではなく甘い香りが下
りてきた。

「あつくん!!」

忘れていた記憶とともに全身が震えたよ。

ゆっくり振り返ると……だれもない。どうやら薬のせいらし
い、今朝も向精神薬と胃薬を飲んだ。そのせいかも。

苦笑いしながら次の階段に向かうと「どこ見てんの〜!?!」手

すりに寄りかかっていた女性がいた。

「・・・さおりん!？」

「おひさです〜!」

とびきりの笑顔で手を振る彼女は以前と雰囲気が変わっていた。

リクルートスーツにお決まりのバッグ。黒い髪をうしろに縛り、形の良い耳からうなじにかけて艶のある肌、首筋のラインは鎖骨にかけて白黒の凹凸が輪郭をなぞる・・・妄想せずにはいられないよ、まいった。目線はちゃんと胸元に行くよう計算されている。

パツと見は誰が見ても面接に行く格好だが・・・

「さおりん!？ ほんとに!？」

「さっ、電車が来るよ! 急いで!」

そういうと俺の腕を掴んで階段を降りはじめた。

「ちょっとまって!？ どこにいくの?」

「あれ〜 これから準決勝戦ですよ〜」

「はい!？」

「待って今日は・・・」

「未来時間ってやつですね〜!」

強引に引つ張られ、そのまま地下鉄のホームに出るとタイミングよく電車が到着した。

2人が乗ると扉は合わせたように閉まる。乗客は誰もいない・・・以前の状況を思い出すとイスに腰を下ろした。

「さおりん、準決勝って・・・」

「そうですね〜 忘れていました〜?」

「過去に戻るってこと？」

「そうです〜 この電車は過去行きです〜」

「だめだよ、調子悪いし・・・たぶんやられちゃう・・・」

「大丈夫、さおりんがついてるよ」

さおりんは俺の顔を両手で包むとそつと胸に引き寄せた。

「あつくん、心配しないで」

これを幸せと呼ぶのだろうか。

つぎはパチパチと頬を叩かれた。

「大丈夫ですか？ わかりますか？」

視界に映ったのは年配の看護師だったよ・・・

どうやら会計を待っているあいだに少し眠っていたらしい。

「あつ、はい！？ だいじょうぶです、すみません・・・」

「松本さんですよ、御会計できますか？」

会計を済ませると車いすのおばあちゃんが笑って手を伸ばしていたよ。

お兄ちゃん、いい夢でも見ていたんだね〜 だつてさ。

俺はおばあちゃんに愛想笑顔で返すと病院を出た。

「たしかにいい夢だったよ・・・準決勝はたしか、10月だったよな・・・」

去年の10月には何も起きなかった。そうすると今年だろうか？
それとも千年後だったりして。

8月18日

朝食後にゆっくり新聞を読んでいると電話が鳴った。その時間には俺しかいなかったから仕方なく電話に出た。それは都内の病院からだった。

「松本さん、検査結果が出まして・・・」

翌日8時、検査入院のため着替えを詰めたバッグを持つと両親に付き添われて家を後にした。

病院につくまで両親とはあまり口をきかなかった。というより何を話せばよいのかもわからなかった。

そんな感じのまま病院に着いた。

さっそく診察室に呼ばれると先生が書類を整えていたところだった。

「急なことで申し訳なかったです」と先生が言った。

「詳しいことは検査をしてみないとはいっきりとは申せないのですが・・・2、3日様子をみてみましょう」

「先生、俺ガンですか？」

俺の問いに両親の顔を見ながら眼鏡のブリッジを押さえた。

「多少の疑いはありますけど同じような患者さんにも同様にしていますのでそんなに心配することはないでしょう」

俺には言いなれたセリフに聞こえたよ先生、『たぶんガン』それ以外にないでしょ・・・

「では、お部屋にご案内します」

6人部屋の、入ってすぐ右手に準備されているベッドだった。簡単に先生から今日の予定を言われた。さつそく検査を始めるらしい。両親は他の患者に挨拶をすますと「また明日くるから・・・」そう言って帰っていった。

さつそく血圧、血液採取、レントゲンなどを終わると部屋に戻った。

「お兄さんは何で？」となりの爺さんが聞いてきたよ。

「ええ、検査入院です」

「そうか、若いのにな」

おい、まだ死ぬと決まったわけじゃないよ！

ガラガラと昼食が運ばれてきた。

献立はご飯のおかず、白身魚の煮つけ、豆腐の味噌汁、ホウレンソウの御浸し、ごぼうと人参のきんぴら、デザートにヨーグルトがあった。

全体的に味気なかったが俺がつくるものと大して変わらなかった。

午後はゆっくりと昼寝をしたよ。こんなに落ち着いて寝られたのは久しぶりだ、というより記憶がない。

薄茶色のカーテンに包まれながら天井を見ていると時間が止まっているようだ。一人でニヤついているとサーツとカーテンが開いた。

「松本さん、血圧を測ります」

夕食を済ませると静かになった病院内を回ってみることにした。

昼間の騒がしさはどこにもなかった。唯一テレビの音が漏れているくらいだ。

この感じ、どこかの閉店前の温泉街に似ている。

たしか・・・そうだ、あれは限定解除をとってすぐバイク店に駆け込み、同じく免許を持っていた友人と日光までツーリングに行く

た時だ。

その日は2人で近場を流していた。2人のバイクは揃ってニンジャの750Rだった。彼は赤、俺は青のカラーだった。

昼過ぎにコンビニに入ると缶コーヒーを買って外に出た。

「これからどうする？」俺が聞いた。

「たまにはどっか違うところ行きたいね」彼が答える。

ちようどそのときZZR1100が入って来た。彼はタンクバッグをつけていた。

「こんにちは」メットをとった彼は白髪頭の似合う凜々しい中年だった。

「こんにちは、1100ですか」

「ええ、あと10歳年食ったら乗れないからね、たぶん」

「そのころはハーレーあたりですかね？」

「間違いないだろうね」笑いながらいうとコンビニに入っていった。

コーヒーを飲み干した頃に彼がコンビニから出てきた。

「ここから奥多摩までどれくらいかな？」彼は奥多摩に行くらしい。

「そうですね、『それ』なら2時間とかからないでしょうね」

「そうか？」

ニツとしたのをみて聞いた。

「今日はどちらからですか？」

「ああ、佐野から」

「栃木ですか」

「そう、この時期はどこも走りやすいよね！　あまり観光客もいないからさ」

「そうですね、紅葉もまだだし」

俺たちは国道4号を北上していた。ガソリンが空になるまで走り続けたよ。

宇都宮を過ぎたあたりでガソリンスタンドに寄り満タンまで給油する。

「いろは坂もこの時間なら空いているでしょ」

「そうだね、じゃあ中禅寺湖までどう？」

「乗った！」

スタンドを出るとそれがスタート合図だ。

120号を走って『いろは坂』の看板が見えてくると徐々に興奮が増してきた。

ほんの少し前を走っていた俺は第2いろは坂入り口手前で路肩に止めた。

「やっぱり観光しなくなったよ」

「そうでしょ！　俺もそう思ってた！」

明智平でポーズを決め写メ撮って再び走り出す。

中禅寺湖に着いた時には5時をまわっていた。

「なんか寒いね・・・」薄着で来たのをちよつと後悔したよ。

さすがに5時を過ぎるとはやくも土産屋などは看板を下ろし始めていた。

「店、閉まつちやうんじゃない!？」

「ねっ、どっかで飯食おうよ」

「急いだ方がいいかもね」

俺たちは駐車場の完備されている比較のおおきな店に入った。

「すみません、まだ食事出来ますか？」

「どうぞ、どうぞ」

「ここは何時までやっていきますか？」

「うちは7時ですけど、でもどこもその時間には閉めますね」

山菜うどんに天ぷらそばを注文した。待つあいだ、客は1人も入ってこなかった。

店に入ったとき5組いた客も6時過ぎると俺たち2人だけだった。

「田舎時間つてやつかな・・・」

「なんかさみしくなるね」

「人口が多いっていうのも悪くないかも・・・」

あたたかい食事で心も満たされると次は眠気におそわれたよ。

「金払ってでもいいから車で帰りたい」彼がそういうと俺も頷いた。

会計を終えて外に出るとシンと静まり返っている。

日光は本日の営業を終了いたしました、なんてアナウンスが聞こえてきそうだったよ・・・

翌日は早朝の採血から始まった。

まだ7時だ、こんな寝起きの状態で注射を打たれるのは、重要会議の朝にでも目覚まし時計がとまっていた時のあの心拍数に近いだ

ろう、なんて。

午後はこれまた初めてのMRIだ。が、これは肉の輪切りしか思いつかない……

そんなこんなで1日が終わった。

次の日は問診だけだった。

その次の日も、またその次の日も。

さすがにちよつとした疑問が頭をよぎったよ。俺はたしか検査入院のだけのはず……

問診の時に先生に尋ねた。

「先生、俺いつ検査入院終わるのですか？」

先生は問髪置かずに答えた。

「今週いっぱい様子を見て、検査結果が出たらその時予定を組みましょう」

にこやかな笑顔で肩を軽くたたくと隣の患者さんに声をかけた。

「調子はどうですか？」

「ああ、夢ではあさんが早く来いって手招きしていたよ」

「アハハ、そうですね。でも私の方が先にお会いするかもしれませんね」

「先生よりわしゃ、若い子が気の毒で」チラツと俺を見たよ。だから勝手に殺すな……

入院生活は最初の頃は慌ただしかったが、やがてやることなく暇になった。

一週間経つても結果が出ず、先生は細胞がどうたらこうたら……と難しい専門用語で話す始末だ。

予想通りというか、おおよその見当は確信に変わっていったよ。

次の日から食後に薬を与えられるようになった。

「これ、何の薬ですか？」看護師に聞く。

「これは血液をきれいにする薬です」そう答えた。「食後に必ず飲んでください」

病院で出される薬だ、飲むことに間違いはないのだろうが腑に落ちない。

詳しい説明もないまま言われた通り飲み始めたよ。

それから1週間後。

あいかかわらず退屈な日々を送っていた。変化といえば俺の前にいた患者がいなくなり、新しい患者が入って来たぐらいだ。

中学生の男の子。細身ではあるが身長は俺より10センチ高い。顔は面長だが整っている。

彼は何の病気で入院してきたのか興味があつたが誰とも口をききたくないといった風だった。

ただ彼は1日中、本を読んでいた。それも時事本ばかり・・・高校受験のためか、はたまた将来は政治家か？

その日の夜はなぜだか寝つけなかった。

おそらく入院生活にどっぷりと浸かってしまったのだろう。時計を見ると午前1時を過ぎていた。

のどが渴いた俺は1階にある売店の自販機でお茶を買い、誰もいないロビーで半分飲んだ。

窓から柔らかい月明りが差し込んでいる。

「松本さんですよ？」

突然の問いかけにホラー映画を思い出したよ・・・やさしく囁くよ
うな声だった。

振り返るとあの中学生が真後ろのソファ―に座っていた。

「びっくりした・・・いつから居たの!？」

「いま来たところです」

「そう・・・」

俺は正門を後ろに座っている。もちろん正門は嚴重に閉まっているし厚手の白いカーテンで閉められている。

俺はすぐ左手の階段を下りてきた。右手側はメイン通路になっていて階段はずつと先だ。要するに俺の目に留まらず後ろに座るというのは不可能なんだよ。

「ニンジャみたいだ」俺は皮肉を込めて言った。「何か飲む？」

「いいんですか？」

「いいよ、好きなの選んで」

俺は自販機で、どれにする？ いいながら500円玉を入れた。

「では、その赤いのを」

「赤いの？」俺は赤い缶の飲み物を探した。ちょうど月明りが自販機に反射して背景をとらえた・・・

ゾクツ！ としたよ・・・どっかで見たことのある化け物が映っていた。そう懐かしくない匂いとともに。

俺は反射的に隣の自販機に移った。振り向く間もなく500円を入れた自販機に見事な穴が開いていたよ。

「さすがは予選突破者だ・・・」突っ込んだ穴から手を引き抜いた。

そいつは化け物ではあったがどこか以前の奴とは雰囲気が違う・・・そう、全身が金属繊維だ。ステロイドビルダーではない、人間の

形ではあるが表情はない。

「なにっ!? だれ!?!」思わず腰が抜けた。「なんだよ!?!」
階段の手すりに手をかけなんとか踏ん張った。

夢だろうか!? 目の前に筋骨隆々の中学生がいる。その体は月明りをうけ乱反射している。

「まつもとあきら」カタコトの日本語だよ。
バチバチと自販機がショートして消えた。

「そうだ、お前・・・なんだ!」何を言っているか俺もよくわからない。

「ころす」音程のかわらない言い方で返してきた。「まつもとあきら」

宇宙人がこいつは? 「まで、俺は病気だ! もうすぐ死ぬ! だから殺す必要はないだろ!?!」

ぎこちない歩き方で1歩1歩近づいてくる。「おまえはしなない、だからころす」

「なんでそんなことわかるんだ!? 医者か!?!」言ったあとでアホな質問をしたと思った、どうみても医者には見えない。

「までよ! なんで俺を殺す必要がある!?! お前はだれだよ!?!」
それには答えずに腕を振り上げた。

やばっ!

俺は階段を這いあがって逃げようとする奴は俺の右足首を握った。

気がついたらロビー中央まで投げ飛ばされていたよ。どうやら脇腹を強く打ったみたいだ。

「イテテ、夢じゃないなこれ」なんだかおかしくなってきたよ。

「やるゝ ぶざけやがって」

立ち上がった俺はメイン通路を走り出した、とにかく誰かに気づいてもらえば奴は手を出してこないだろう。

俺はあの紙切れに書かれていたのを思い出した。「まだ10月じゃない、なんだあいつは!？」

やつは追ってこないのか？ 振り向くと同時に奴の顔がそこにあった。

「うわっ!」とつさに距離をとると近くに整理されていたパイプ椅子を掴み投げつけた。

まあ、そんな都合よく当たるわけない、階段を目の前にして追い詰められたよ。

「こういう状況のときは正義の味方が必ず現れるもんだろ!？」

「せいぎのみかた」奴が復唱した時だった。

階段から飛びかかった人が奴を押しつぶした。

さて、さて・・・どう考えてもこれは現実ではないよ。とうとう俺の頭がイカレたらしい。

俺の目の前で奴と格闘しているのはあの化け物だ、なぜ？ 幻覚か？

化け物は奴の首を掴みあげるとソファアームに叩きつけた。もちろんソファアームは粉々だよ。

そのまま力任せに首を引きちぎった。

化け物が振り返ると俺と目が合った。

「松本晃・・・なぜこいつらがお前を消したがるのか」

言っている意味が分からないよ、しかしなんとなく知的な化け物だ。奴がモゾモゾと動き出すと俺の視線に気づいた化け物は右手の5

本の指を伸ばし奴の両足、両腕、胴と刺し動きを封じた。頭は首と
かろうじてつなぎとめていた金属繊維が元の位置に戻すべくうねっ
ていた。

化け物がおもむろに取り出した黒い石をそいつの胴に落とした。
よく分からなかったがその石は奴を一瞬で黒い灰の塊に変えた。
化け物は石をとり、しまつと徐々に人間の姿に戻っていった。

「誰だ、あんた！？　なんで」言いかけたがそいつに見つめられる
と頭の中が真っ白になり俺は意識を失った……………

続く

「8月32日」 覚醒編 前篇（後書き）

晃の向かう世界はいつたい・・・

覚醒編 後編

覚醒編 後編

「ん!？」なんだかとても温かい。

目を覚ました俺はゆっくり起き上がった、完全に日が昇っている。

「・・・何処だ、ここは？」

どうやら俺は草むらにある突き出た岩場に寝かされていたようだ。辺りには誰もいない、鳥の鳴き声だけが聞こえる。

「まったく、なんだってんだよ」言いながら立ち上がった。

「目が覚めたようだな」

ハッと声の主を探す。確か誰もいないはずだ、もう一度回りを見回す・・・しかし誰もいない。

「ここだ」その声はすぐそばからだった。

もしかしてと、さっきまで寝ていた岩を見た。

するとその岩は奇妙にうねりながら徐々に人の姿になっていく、やがて全身を現した。

どう見ても普通のサラリーマンだよ。カバンは持っていないけど、

スーツは高そうだ。

今時の7：3分け。スツと横長の細い眉と目を持っている。唇が薄く気が短そうだ。

まあ、よく言えば出来るサラリーマンといった感じだろうか。

「松本晃」その人は言った。「間違いないか？」

初めて見る顔だ、ちよつと後ずさりしたよ。

「そうだけど!? あんた、だれ!?」すでに逃げる準備は出来ている、無理だろうけど。

「よく聞け、いいな!?」声に感情は感じられない。

「ああ・・・」どうやら手は出さないらしい、内心ほつとした。

「この島は周囲約10キロある。そこで」

「島!?」思わず聞いたよ。

「死にたいのか!? 最後まで聞け、分かったら返事をしろ」真顔で言われるのが一番怖い。

「はい、すみません」

「この島は周囲約10キロある。そこでだがこの島にいる【奴ら】を倒し、生き残れ。【奴ら】の人数は5人。味方はお前を含め6人だ、この島の何処かにいる。迎えは【奴ら】を全て倒した時に来る。当然、お前たちが全滅していたら来ない。分かったか？」

「はい、つてよく意味が分からないんですけど・・・」

「準決勝、こう言えば分かるか？」

「今日は10月では・・・」あの紙には確か準決勝は10月って書いてあったはず。

すると近づきながら再びの真顔で俺の顔をのぞいてくる。

「我々の時代ではお前たちの歴は当てはまらない。とにかく生き残って決勝まで行くことだ、私の顔を潰すんじゃないぞ。じゃあな・・・」

「

じゃあなつて、言い終わると振り返って行くこととするのを思わず呼び止めたよ。

「ちょ！？ ちょっとまって！」あわててその人の前に出る。

「言う事は全て伝えた、まだ何かあるのか？」相変わらず真顔だよ。

「戦えつて・・・武器も無しで！？ 死んだらどうすんの！？」必死だよ俺は。

「死んだ後の事は我々が責任を持って対処する、心配するな・・・しかし武器も持たずに来たのか？」

あはは、おかしな質問だね、だってあんたらが勝手に連れてきたんでしょが！ なんて言いたかったけど我慢した。

「何でもいいから武器を、お願いします！」思わず土下座までしてしまった。

「私も今は持ち合わせていない」

「何もないの・・・そんな」愕然としたよ、俺の葬式の風景が浮かんだ。こじんまりとして人も少ない、こんな感じになるのは間違いないだろう・・・

その人はそんな俺を哀れに思ったのか？ ポケットから例の黒い石を取り出した。

それは病院であの化け物が持っていたものだ。そう、あの金属繊維の人を瞬時に炭に変えてしまうあの石だ。

という事は【奴ら】って・・・あの金属繊維の人！？ それじゃ、

この人は化け物ってこと!?

「それ・・・」物乞いみたく手を差し出した。これさえあればなんとかなる!

「これはだめだ」っておい、死刑判決だよ。

「なんで!? 武器も無しに戦えって? 生き残れないでしょ! あんたもメンツ潰されたくないんでしょ、だったらお願い!」とにかく必死にお願いしたよ、生きるか死ぬかの瀬戸際だ。

「これは限られた数しかない、無くされでもしたら」

俺がどうせ死ぬのに、みたいな顔だよ。ひどいよね、しかし今はそんなことに構ってられない。

「無くしません! 約束します! 生き残って必ずお返しします!」こんなに元気よく声を出したのは営業の仕事以来か。

その人は少し考えたようだが、深呼吸すると仕方ないといった感じで俺の手に置いた。

「無くすなよ、これはお前の命より重い」

「はい! 必ずお返しします!」深々と頭を下げたよ。

「では、しっかりやれ」

その人はそう言い残して立ち去っていった。

「俺の命より重いつて・・・納得。しかし生き残れって・・・仲間
は5人って言っていたな。」

「さおりんもいるのかな・・・」

その石を見てフツと我に返った。「腹減った・・・」

いま俺がいる周囲約10キロの島の簡単な説明。

海岸付近を除いてはほぼ森林地帯だ、所々に開けた場所がある。その中には湧水が出ている所もあるが人が住んでいた形跡はない。どうやら完全な無人島のようなようだ。

しかしこの時代はいつの時代か・・・

食べ物も無い、海に潜って魚貝でも捕るか、しかし湧水のある場所同様に【奴ら】は俺たちを待ち伏せているだろう。とまあ、こんな状況だ。

「さて、どうするか」

仲間を探すか、このまま隠れているか、【奴ら】を倒すか。

いまさらこの世に未練があるわけでもない、大した人生でもなかったしいつ死のうがそれならそれでいい。その前にガンにやられて死んでしまうだろう。しかし殺されるという選択肢は俺の中には無い。それなりに真つ当に生きてきたつもりだ。

そう、時には真面目に、時には影に徹し、ある時はしたたかに大胆に。

昔の人は生きる選択肢が限られていた。ところが俺の時代には選択肢は無数にあり、選べる。

【奴ら】の住む未来はどうだろうか？ あれは人なのか、はたまた異星人か・・・あの化け物は間違いなく人の進化した姿だって言うていた。

「今の俺がああな化け物の先祖様ってことか？」自分で言いながら笑っちゃったよ、そんな遺伝子が俺にもあるのかな？ なんてね！しかし黒い石は俺をその気にさせたよ、これさえあれば【奴ら】にだって負けはしない。

「俺の人生賭けてみるか・・・宝くじにも当たったことないけど」
どのみち【奴ら】を全て倒さなくてはここから生きては帰れない。
殺るか殺られるか、単純だ。
俺は大きく深呼吸をしたよ。

『殺したいほどムカつく奴だと思えばいいんじゃないか!?』

今の言葉って俺が言ったのか？ その言葉は自然に出てきた。それと同時にいい人を演じるため無意識に抑えていた。『はらわたが煮えくり返る感情』が沸騰してきた。

『ここでは好きなだけ悪に身を委ねられる』

以前、赤外線スコープを使って一晩中、山を散策？ したことを思い出した。

そこは恐怖と興奮が入りまじった世界だ。

そこでは夜行性の動物が徘徊していたがそれらの頂点に立っていたのは間違いなく俺だった。

いのしし、あれは美味かった。どうして捕まえたかは聞かないでくれ、ちよつとしたスリルと冒険だよ。

「本当に俺が望む世界、それは弱肉強食の世界だ」これが本心。

こんな時代に生まれなければ俺という人間は時代の御荷物にはなっていないかつたろう。

いつそのこと戦国時代で俺という人間を生かしたかつた、こんな偽善平和というぬるい世界では無く。

『男女平等？ 差別反対？ 世界平和？ そんなもの糞くらえ！
差別なんてあるに決まっているだろ、男女は平等じゃねえし、ま

して他の国の事なんてかまうほど人間、出来ていないね!」

言い終わるとブルブルと魂が震えたよ。そう、ここでは誰にも遠慮することは無い、思いのまま感情に身を任せ【奴ら】を狩ってやるう。

そうさ、俺の中には思い起こせばちょうど5人、殺してやりたい奴がいる。

俺は目を閉じ頭の中で狩る順番を組み立てる。

1人目はあいつ、2人目はあの男、3人目はあその女、4人目はあの女、そして5人目は間違いなく奴だ。

ゆっくりと目を開けると少し景色が違って見えた。そう、この世界が迷いなくはつきり見える。

俺の腹のあたりはしっかりと熱を持っている、そこには怒りの感情がとめどなく溢れている。

「・・・では1人目を探すか」俺は石を握りしめると森の中に入っていた。

夕方、俺は高い木に登り身を潜めている。

辺りは木々が生い茂り近くには湧水で出来た直径10mほどの池がある。恐らくここに誰か来るだろう。

「これが自然の空気ってやつだよ」

そう、汚染とは縁のないこの島。その空気を肺に取り込むだけで生命力に満ち溢れ力がみなぎってくる。

やがて地平線に沈む夕日を見終えると森は性格を変えた。

夜行性の動物たちが動き出し、そうでないものは日の出まで息を潜める。

そう、ここは『闇の掟』の世界だ。強いものは生き残り、弱いものは死ぬ、単純だ。

いつの時代も長生きする者もいれば早死にする者もいる。違いは特にない。ただ、息絶える時に後悔をしてという死に方はだめだ。

やることやって『そこそこ』人生納得できるものであればそれでいい、『そこそこ』以上望むものは欲に支配された哀れな奴だよ、人生の楽しみ方を知らない。

大事なのは自分が『そこそこ』納得できたのか、これだけ。

誰に向かって言っているんだ！？　なんて考えていたらやっぱり池に現れたよ、男女の2人組。

でも人間なのか【奴ら】なのかは分からない、男の方はスキンヘッドだし女の方は金髪のロングヘアだ。

残念なことに俺のいる高さからでは顔までは拝めない。でも2人も同じ白いコートを着ている。

「白いコート？　目立つよね、わざとか!？」

人間か【奴ら】か・・・　どちらかがわざとおびき寄せているのだろうか？

2人は1言2言話し終わると、男は近くの岩場に身を隠し、女はコートを脱ぎ水着姿になると池に入っていった。

その女はパシャパシャと音を立てながら水浴びをしている。その仕草は誰かを誘き寄せるように暗闇に響く。すると髪をとかし後ろで縛ると今度は泳ぎ始めた。

それにしてもスタイルが良い、胸も程よい大きさだしその腰つきは妙にそそる。

「でもこんな暗闇でやることじゃないよな」

30分くらい経っただろうか、女は池から上がった。

縛っていた髪を解き丁寧に整える、そして掛けてあるコートに手を伸ばした。

「どうした？」

女の動きが止まっている。そこにサバイバルナイフを女に突きつけた男がゆっくり出てきた。

「やめて、誰あなた・・・」

「こんなところで水浴びか？」言いつつ男は女の後ろに回るとそのきやしゃな首に腕を回した。

「お前一人か、仲間は何処だ」辺りを窺いながら腕に力を入れる。

「やめて！ 私一人よ！」女は腕を掴んで抵抗するが微動だにしない。

「そうか、いいだろう。ところでお前どっちだ!？」

「何言っているの、見ればわかるでしょ！ 女よ！」

その男は首を絞めていた腕を緩めると、左胸の水着の中に手を入れ感触を確かめるようにその乳房をゆっくり揉みはじめた。

「やめてよ！」女はその腕を振りほどこうとするがサバイバルナイフをちらつかせると大人しくなる。

「やはりな、お前人間ではない」

男はサバイバルナイフの柄に付いているボタンを押す、するとバチバチと高圧電流をまとった。

「悪く思つなよ」言いながらサバイバルナイフを脇腹にあてる、どうやら心臓付近にある動力を狙っているようだ。

「そこまでだ」

スキンヘッドの男がその男の背後に張り付いた。

男の背から腕を突き刺している、そう心臓に狙いをすませて。

その鋭利な腕を引き戻すと男はすでに目を見開いたまま別の世界にいつていた。

「もう少し早く来てよね」女は言いながらコートをとった。

「すまない、人間の行動を観察していた。悪く思わないでくれ」すまなそうに頭をなでたが無表情だ。

「まあいいわ、しかし人間って単純ね。こつも簡単に引つかかるなんて」

「まあな、単純な生き物だ」

「次はミラ・ジエイド、女よ」

「ああ、俺の出番だ」

2人は確認を終えると森の中に消えていった。

「あれは金属繊維の・・・病院で襲ってきたやつらか？」

俺は足元に倒れている男の胸に出来ている穴を見てそう確信した。

あの自販機をその腕で破壊してしまう鋭利な腕だ、人間ならひとたまりもない。

「しかしこの男も選ばれて来ているはず」

すでに息絶えているその男は良く焼けた肌に茶色の革のロングコートを着ていた。

筋肉質で髪はアフロに近い。何処の国の人だろうか、おそらく南米あたりだろうか。

俺は男が手にしているサバイバルナイフを拝借した。

「軽い……」

試しにボタンを押してみる、するとやはり電流をまとった。

「金属線維には電流か……」

俺はその男からナイフケースを取り外すと腰に付けジャージで隠した。

「仲間はあと4人」俺は2人の後を追っていった。

暗闇の中では音が一番の頼りになる。

視界は効かない、まあ街灯でもあれば話は別だが。

ここでは月明りだけだ。しかし月明りだけでここまで視認できるといふ事は都会暮らしの俺には想像もつかなかった。木々の下は暗闇の世界だが少し開けた場所なら姿形は目視できる。

満月が真上に来るころ、海岸近くの岩に身を潜めていた俺はその戦いを見ていた。

どちらが人間でどちらが【奴ら】かは、すぐに分かった。

一方的に攻め込まれているのが【奴ら】だ。金属繊維むき出しで抵抗している、こんな光景も初めて見る。

圧倒的に攻め込んでいるのはどうやら人間の男だ。鍛え上げられた体に見たことも無い武器を持っている。あの身のこなしは間違いなく武道家だ、そういえばあの紙に中国人の名が書いてあった気がする。

しかしあの武器は反則だね、手足に取り付けられている防具のようにも見えるモノが自由に伸び縮みするし切れ味も良い。当てると、

やはりこちらでもバチバチ電流が流れるみたいだ、でもあの体術がなせる業だろうけど。

男は金属繊維を寄せ付けず一定の距離をとりながら実に見事な戦いぶりを展開している。

金属繊維が近づこうものならその餌食になる、傍から見れば遊んでいるようにも見えなくもない。

そうこうしているうちに奴の右腕が切り落とされた。

しかしそれに構うことなく攻撃を続ける、完全に息の根を止めない限り【奴ら】も攻撃を止めないのを承知の上だろう。

しかしどうすれば息の根を止める事が出来るのか？ 俺の持っている黒い石は間違いなく使えるだろうがそれ以外の方法を知らない。

そうこうしているともう一つの腕も切り落とされた。どうやら先ほどの腕といい再生は出来ないようだ。

「勝負あったか？」

金軸繊維はそこから離れるように逃げ出した。

彼もそのあとを追う、すると金属繊維が突然止まり振り向きざま飛びかかった。

しかし奴の胸には2本の武器が貫通していた。

「馬鹿だね、頭悪いのか・・・」

しかし俺の判断と彼の判断が間違っていたよ、さっき切り落とされた腕がシュルシュルと引き寄せられると奴の腕は元に戻った。

どうやら数本の繊維が残っていて完全に切断していなかったようだ。彼は咄嗟に武器を引き抜こうとしたが金属繊維が絡みついて抜けなくなっている。

金属繊維は間をおかずに彼の両脇腹から鋭利な腕を瞬時に伸ばした。それは両肩口から出てくるとクロスを描きそのまま上空に持ち上げた。まるで獲物を仕留め喜びを表すように。

金属繊維は満足したのか彼を地上に置くと体を震わせながら人間の姿に戻っていく、そこに先ほどの白いコートの2人が現れた。

「遊びもほどほどにしなよ」さっきの女だ。

「遊び心だ、どれほどのものか確認したまでだ」完全に人間の姿になると落ちている白いコートをとって着た。「そっちはどうなんだ？」

「ええ、1人ね」女が言うとニヤツとしながらスキンヘッドが言う。「遊び心だ」

「そうか、で、あと4人なのか？」

「そうだ、夜が明けるまでには片付くだろう」

「では先に我ら3人でミラを仕留めよう」

「そうだな、残りはカスだ」

「ああ」

「ミラは海岸にいるわ、しっかり罠を仕掛けているみたい」女が指さした。

やれやれといった感じで3人は海岸に向かって歩き出した。

「ミラ？ に3人がかりか・・・」俺は3人の後をつけて行った。

ミラ・ジエイドはたしかアメリカの女性だったような、それに遠い未来の人だったはず。

なんにしても俺の理解と想像は役に立たないだろう。

しかしなんだってこんなことになってしまったのか・・・考えても答えが出ない事は分かっているがそれでも考えてしまう。

「違う世界でそこに化け物がいて、さおりんと会って現実世界に戻った方がいいが金属繊維の人間がいて準決勝という戦いを強いられている。未来の人間、進化した人間・・・だめだこりゃ」

白いコートを着た3人組は海岸に着くとそれぞれその女性を囲うように位置に付いた。

ミラ・ジエイド、まだ少女だ。中学生、高校生くらいだろうか？赤い短パンに白のタンクトップ姿だ、長い金髪が月明りに映える。目の色はスカイブルー、ラフな格好で武器を持っていないというか何にも持っていない。

「大丈夫なのか？」

ミラは岩に腰かけたままだ。3人を確認すると頭にインプットするように順に見ていた。

「ミラ、あの時の借りを返させてもらおう！」

スキンヘッドが岩場を駆け出すと残りの2人も同時に駆けだした。3方から寄せられたミラの後ろには海が広がっている、逃げ場はない。

3人は金属繊維に姿を変えるとその鋭利な腕を一齐に突き出した。ミラは動けなかったのか、6本の鋭利な腕の餌食となってしまった。

「あれでは避けようがない・・・」

しかしミラは動かず血も流れていない。

そこに突然海中から何かが伸びてくるとスキンヘッドを驚掴みにし、

一気に海中に引き込み、間髪置かずにボンっという音とともに黒焦げのスキンヘッドが放り出された。それは岩場のミラの前に転がった。

2人の金属繊維は瞬時に距離をとる。

俺が病院で見た光景といっしょだ、あの黒い石の力に間違いない。

「本体はこいつではない！」女が言う。

「ああ、海にいる奴だ！」

しかし目の前にいるミラは男に向かって歩を進める。

「気を付ける！ 罠だ！」女が下がれと指示を出す。

しかし男は再び鋭利な腕を突き出す。それをそのミラは軽くかわすと懐に飛び込んだ。

「残念でした」

そのミラは男の首を掴むと瞬時に、ことも無く引きちぎった。

「すげ〜 なんだあれ!？」

男は首を引きはがされると動かなくなった。

「そつえば病院でも首が戻ろうとしていたな・・・弱点は頭か!？」

そのミラと女が対峙していると海から同じ姿のミラが現れゆっくりそのミラに近づくと抱きよせた。

「くろろつさま」

するとそのミラは消えた、まるで映像が消えていくように時間をかけて。

「あなたが本体ね、ようやくお目にかかれたわ」1人残った女が近

づく。仲間が倒されたことに動じてはいないようだ。

「それはどうかしら？ 試してみる？」ミラはおいでと両手を広げた。

「やめておけ！」そこに黒いコートを着た男が現れた。

暗闇のなか、黒いコートを着ていて気が付かなかったが女の背後から現れたその男はおそらく仲間だろう。

「ミラはあいつがやる、手を出すな」

長い黒髪を後ろで縛った男が言う。「残りの者をかたづけろ」そうして女の肩に手を掛けるとおとなしく引き下がった。

「ミラ、そういうことだ」そう言い残すと2人は森に走り出し消えていった。

「残念、ここでみんな殺つてやろうと思っていたのに」ミラは2人の姿が消えると海に入っていく、そして誰もいなくなった。

「なんだあいつは・・・ミラって何者？ あの子1人で十分勝てるんじゃないの・・・」

俺はどうしようか考えた。

金属繊維が俺を探し出すのに時間はかからないだろうしミラ以外はカスらしい・・・

「隙を見てこいつで仕留めようとしたけど近づいたらあの手で刺されておしまいだな」

俺は黒い石を見ながら呟いた。

辺りに誰もいないのを確認すると黒焦げのスキンヘッドに近づいた。
「やはり間違いない、石の力だ」

病院で黒焦げになっていたのと同じだった。

そこにキシキシという音が聞こえた。ドキツとその音の方に目を向けると、先ほどミラに引きちぎられた男の目が開いたり、閉じたりしている。

「ゴフツ・・・おまえ・・・」何かを必死に伝えようと俺に話しかけている。

俺はゾツとしたが手には黒い石がある、それに男の体は動く気配はない。俺は警戒しながら恐る恐る近づいた。

「人間・・・ミラを・・・消せ、なにが・・・あつても」

「ミラを!? なぜ!?」

「奴が・・・」

「奴!? おい!」

「手を・・・」

「手!?」

「私に・・・触れる」

「おい、まて!」

男そのまま目を閉じると俺の問いかけには答えず、再び動くことはなかった。

「なにがどうなってんだ・・・私に触れろって!??」

俺は疑いつつも好奇心を抑えきれない、しっかりと黒い石を右手に握りながら左手でその頭に触れた。

するといきなりシュルシュルとその頭が金属繊維状になると俺の左手に巻きついてきた。

「うわあ！」

必死に振りほどこうとするが取れない、すがる思いで黒い石を当てるが何の反応もしない。

「なんで！？ たのむよ！」ガシガシと黒い石を当てるがやはりだめだ。

「あいつ、だましやがったな！」
そうこうしているうちに俺は岩に足をとられ転んでしまった。

ハッと目が覚めると、頭の痛みに気づいた。

どうやら転んだはずみで頭を岩に打ち、意識を失っていたらしい。

「あいつは！？」左手を見るが特に何も変わっていない。

近くには黒焦げのスキンヘッドが横たわっているが、あの男の頭と胴体は無くなっている。

「なんだ・・・」俺は言い知れぬ恐怖を感じ、そのまま振り返りもせず森に駆けていった。

俺が向かった先は洞窟だ。

その洞窟は山の急斜面にポツコリと大きく口を開けている。

そう、なぜだか分からないがまるで引き寄せられるようにその洞窟に入っていた。

入り口は大きいが少し進むとドア1枚分の大きさになった。

そこから先は光が無く闇の世界だ、時折コウモリが顔のそばをかすめるように飛んでいく。

やがて行き止まりまで来るとその壁の上5mのところに直径1mほ

どの穴がある。

俺は岩に足をかけ一気に飛び上がると穴に手を掛けの中に入った。た。

その中を這いつくばりながら先に進むとピンク色の石を見つけた。

そのピンク色の石は削られた祭壇らしき中心の穴にしっかりとハマっている。

その大きさは卵2個分くらいだ、軽く手に収まる。

「これを・・・」俺はそのピンク色の石を取ると懐に入れ戻っていた。

洞窟から出た俺は静かに近くの木に登り気配を消した。

《その石、死んでも守れ》

《ああ、わかったよ》

しばらくするとあの長髪の黒いコートを着た男が辺りを窺いながら洞窟に入っていった。

俺には気づいていないようだ。

少しするとその男は出てきた、だいぶ落ち着かない様子だ。必死に辺りを探っているところを見るとあのピンク色の石を探しているのだろう。

するとこめかみに指をさし何やら話し出した。どうやら仲間を呼んでいる様子だ。

「待たせた」その瞬間、その長髪の男は炭になるとゴソツと倒れた。

しばらくすると白いコートの女が現れた。

そして洞窟の入り口に横たわっているその炭を見つめた。

「ミラ……！」

女は状況を理解したのか海岸に向かって走り出した。

俺は女の後を追い再び海岸に出ると、そこには別の黒いコートの男が待っていた。

この男は短髪だ、しっかりと髪を逆立て固めている。

女はその男に近づくと事情を話し始めたようだ。

その先の岩場にはミラがいた。そして2人の男が両サイドにいる。

「ミラよ、石を渡せ。命だけは見逃してやろう」短髪の男がミラに言う。

「そんなにこの石が怖いのか？」ミラは持っている黒い石を見せた。

「とぼけるな、そんなものに用は無い。洞窟にあった石だ」男は手を差し出す。

「洞窟！？何を言っているのか？」

「なんだと？シラを切るつもりならその体に聞いてやろうか！？」

「お前たちが何を探しているのか知らんが我々はそんなもの、知らん」ミラの右に立っている男が答えた。

「本当に知らないようね」白いコートの女が短髪の男に言う。

「そうか、いいだろう。ところでお前たちはそこにいるので全員なのか？」

「ここにはいないという事はそういう事ね、残念だけど」

どうやらここに生き残った人間と【奴ら】が揃っているようだ。

「残念って、俺まだ生きていますけど……」どうやら誰が誰

を殺したかは互いに知らないようだ。

「2人とも準備はいい？」ミラが軽く手を上げる。

「ああ、いつでも」

「同じく」

ミラは2人を引き連れ、短髪の黒いコートの男に近づいた。どうやら互いに駆け引き無しで戦うらしい。

「さあ、始めましょう」

「そうだな。だが、ただやるだけでは面白くないだろう？　そこで1つ提案だが1人ずつの勝ち抜き戦はどうだ？」

「勝ち抜き戦、面白そうね。でもあなた達では私には勝てないわ、残念だけど」

「そうか、では受けてくれるのだな？」

「いいわ」

「では最初に戦うもの以外は離れていてくれ、勝敗は」

「死んだ方でしょ。まるでゲームね、ではこちらからはエル・ハマドが相手をするわ」ミラの右隣にいた男が前に出た。

「そうか、ではこちらは彼女が相手をする」白いコートの女に目配せをすると女は前に出た。

「では始めよう」

そう言うとミラとその仲間の男はエル・ハマドを残し振り返った。

そこを黒いコートの男は逃さなかった。

両腕を一気に伸ばし右手はミラを金属繊維で雁字搦めにし、左手は隣にいた男の体を鋭利な腕で貫いていた。

同時に白いコートの女はエル・ハマドを貫いていた。

「こいつはミラではない・・・」雁字搦めにしていたミラは映像だった。しかしエル・ハマドともう1人の男はすでに息絶えていた。

「だまし討ちとは、なかなかやるわね」海中からミラが姿を現した。
「隠れてばかりではいけないな」
黒いコートの男はミラに近づくと、しかしその光景を見ると歩みを止めた。

海中から別のミラが現れ、さらに別のミラが、そして次々にミラが現れた。

気が付くと2人は数百人のミラに取り囲まれていた。

ミラは各々黒い石を2人に向けながら囲いを狭める、これではさすがに逃げ場は無い。

金属繊維の2人は苦悶の表情を浮かべたが、互いに背を合わせ構えた。
た。

そんな2人にミラはまだやるつもり？　と言う。

さすがに観念したのか男は構えを解き、手を上げた。

「いいだろうミラ、君の勝ちだ。我々を好きにするがいい。だがその前に1つ聞きたいことがある」

「いいわ、聞いてあげる」どのミラが答えたのか分からない。

「石だけは返してほしい。それだけが私たちの願いだ」

「石・・・さつきも言ったけどそんな石、知らないわ」

「そんなはずはない、洞窟にあったピンクの石だ」

「どうやらなにか勘違いしているようね？」

「本当に知らないのか!？」

「しつこい男は嫌われるわよ」

「なら誰が・・・」

「その石ってなんなのかしら？」

「それは言えない」

「まあいいわ、教えてくれたら返してあげようと思ったけど」

「なに？」

（ミラのハッターだ・・・）

「やはり持っていたか・・・約束してくれ、教える代りに必ず返すと！」

「だまし討ちしてくる人に約束は出来そうもないけど・・・いいわ、私に必要ないものだったら返してあげる」
男はしばし黙っていたが諦めたように話し始めた。

「その石はある者を封印するために必要なものだ。そしてそれを扱える者は選ばれた者だけだ」

「選ばれた者？」

「そうだ、御使い【天使】だけがその石を扱う事が出来る」

「天使って、誰？」

「それは最後の戦いに勝ったものに与えられる」

「決勝のこと？」

「そう、そして必ず最後に残る者が天使の血を受け継ぐ者と信じている。我ら一族は数千年もの間、その御方を探しているということだ」

「ふーん、そんな話を信じると思う？」

「今は信じられないだろう。しかし我らには時間が無いのだ」

「どうして？」

「これから先、数日のうちに悪の化身が復活すると予言されている」
「どこの予言か知らないけど聞いたことないわ」

「我々の話だ。その悪の化身、サタンの復活を止めるにはその石が無くては誰も止めることは出来ない。復活させてしまっただけは石の力は何の役にも立たなくなる、時間が無いのだ」

「サタンね、何時の時代も似たようなことを言う人が必ずいるのよ」

ね

「いま信じる、信じないは問題ではない、我々は一刻を争っている。そういう訳だ、さあ、返してくれ」

（ まいったな・・・どうしよう ）

「わかった、私には必要ないものだから返すわ」

「助かる、これでこの世界は救われる」

男は安堵の声で言うが、それに対しミラは馬鹿ね、と囁くように言う。黒い石を天に伸ばした。

「みんな、返してあげて！」ミラが叫ぶと2人を取り囲んでいる数百人のミラは一斉に黒い石を投げつけた。

「ミラ！ 裏切ったな！」2人はコートを被り直撃を逃れたが歩み寄ってきた無数のミラを見ると歯を食いしばった。

「そんな石、持っていないわ。残念だけど」

「この世界は必ず滅びる、ミラ！ お前の過ちによってな！」その言葉を最後に無数のミラに飛びつかれた2人は炭になっていた。

「どうやらこれでおしまいね、しかし石の事なんて何にも聞いていなかったわ・・・なんてね」

無数のミラはやがて消えていくと1人だけ残った。

「この調子じゃ決勝もたいしたことなさそうね・・・早く迎えに来ないかしら」そういうと腰を下ろし大きな欠伸をしていた。

気づくと薄っすらと日が昇ってきている、同時にへりの音が近づいてきた。

ミラがそのへりに乗り込むと飛び立って行ってしまった。

「俺は？ どうやって帰れって？」へりを見送りながら呟いた。

「よく生き残ったな」

振り返ると俺をここに連れてきたスーツの男が立っていた。

「えっ！？ ああ、どういたしましてって、あの俺どうやって帰るんですか！？」へりを指しながら聞いたよ。

「心配するな、用意してある。その前に返してくれないか」男が手を差し出す。

「そうか、はい。助かりました、でもこの石って何で出来ているんですか？」言いながら黒い石を返した。

「言ったところで理解できないだろう、気にするな」黒い石をしっかりと磨いて懐にしまった。

冷たいね、というより舐められているよ完全に、口には出さないけどね。

「代わりにこれをやるう」男はおもむろに白い石鹸のような塊を取り出した。

「これって、石鹸みたいですけど・・・」それを渡された俺は匂いを嗅いでみたよ。いい香りだ、何の花だろう？

すると急に眠気が襲い、そのまま意識を無くした。

封印編に続く。

覚醒編 後編（後書き）

そろそろお気付きの方もいるのではないのでしょうか？

では封印編でお会いしましょう。

封印編（前書き）

いよいよ、化け物たちとの戦いも最終章へ・・・

封印編

封印編

再び気が付いた俺は病院のベッドで眠っていた。

両親が心配そうに先生の話聞きながら時折、俺の顔を見ている。

「先生、大丈夫なのでしょうか？」母親が訊ねている。

「はい、特に異常は見当たりませんが昨日の夜から意識が戻りません。原因はこれから検査してみますので」

そういうと看護師らによってそのまま検査室に運ばれていった。

（なんだ！？・・・意識はあるのに体は死んでいるみたいだ）

それから脳波や心電図、MRIなどの検査を終えた俺の体は夕方になつて部屋に戻された。

両親はだいぶ参っていたようだが俺が部屋に戻ってくると駆け寄って聞いた。

「先生・・・」

「詳しい検査結果は明日、出ると思います」

「そうですか・・・」

「どうぞ心配なさらずに明日また来てください」

分かりました、と母親は布団を整え父が荷物を持つと「よろしくお願ひします」と先生に挨拶をして帰っていった。

夜の7時を過ぎたころ、ふと話し声が聞こえた。

「あんたも若いのについてないの・・・」

俺が死ぬと思っっているじいさんがこの間までいたあの中学生のベッドに新たに入院してきている中年の男に話しかけ「かわいそうに」などと言いながらイヤホンを付けるとラジオを聴きはじめた。

じいさんはフツツとたまに笑みを浮かべている。何を聞いているのか聞いてみたいところではあったが俺の体はいうことをきかない。

（ どうなっているんだ、俺の体は・・・ ）

隣のじいさんが「よっころしょ」と用を足しにスリッパを履く。

「兄ちゃん、昨日ピカピカになってたぞ。今日も見してくれや」そういうとトイレに行った。

（ ピカピカ？ なんだ！？ ）

ピカピカに反応した俺の記憶は眠りから覚めるように戻ってきた。

（ ミラ・・・石・・・ ）

それでも体はいうことをきかなかったが意識は完全に目覚めた。

（ 【奴ら】の恐れているサタンの復活、俺を殺そうとした奴・・・ ）

「ここじゃよ、しかしこの若者にこんな綺麗な嬢ちゃんがいたとはの、うらやましいの〜」

トイレに行っていたじいさんが帰ってきた。どうやら見舞客を案内してきたらしいがとっくに見舞い時間は過ぎている。

その娘は入ってくるなり俺のベッドに腰掛けた。そしてカーテンを引いた。

「お楽しみかい？ 若いつていいの〜」じいさんは微笑んでいた。

「あつくん、御迎えにきたよ」

「熱いな・・・」

俺は目を覚ますと体を起こした。やはりジャージを着ている、懐に手をやるとあのピンクの石があった。

体が熱いのかこの場所が熱いのか、とにかくこの熱さは尋常じゃない。

だがそれはすぐに理解できた。

俺が今いる場所は、大小いくつもの火山が立ち並ぶなかの火口の1つ、その火口の山頂辺りにいるらしい。辺りは硫黄と蒸気に包まれている。

見渡す限り蒸気の煙が立ち上り視界は途切れ途切れだ、時折風に流された蒸気の間から海が見える。

「どこだ、ここは・・・」

俺は関節を動かし筋肉の弾力を確かめ体が動くことを確認すると、とにかくこの熱さから逃れるため蒸気の間から見える海に向かって歩いていった。

ようやく熱さから逃れる辺りまで来ると今度は森がお出迎えた、迷わないよう海の方角を確認するとその森に足を踏み入れた。

1時間ほど歩いただろうか、遠くで太鼓のような音が聞こえる。

「まさか原住民とかじゃないよね・・・」

不安よりも興味の方が優先していた俺は音の方に進んでみる、その音は10m進むごとに大きく聞こえてきた。

やがて人のいる気配を感じると、あまり近づくのもなんだから近くの高い木に登って様子を見ることにした。

「ほんとに原住民だよ、まいったね・・・」

その素っ裸の人たちは30人くらいだろうか（大事なところはしっかり隠してある）手に槍や神具を身に付け踊りながら奇声を発している。

どうやらこれから儀式らしい・・・正方形の木の檻に女の子が入れられている。

近くには直径3mの穴が掘られており、そこに人1人が横たわれる台がある。その台の下には点火を待っている燃えやすい木々が無造作に積み重ねられていた。

「いつの時代だよ、食人族か!？」でも、ちょっとその先を見てみると、たくなつたからしばらく様子を見ることにした。

すると2人のマッチョによって木の檻から女の子が連れ出された。

彼女は必死に抵抗しているが力任せに台に載せられると手足を縛られ身動き取れなくなってしまった。

するとその穴を原住民が取り囲み、さらに大きな奇声を上げ踊り始めた。

彼女はとうとう諦めたのか目を瞑り大人しくなる、覚悟を決めたようにも見えた。

「正義のヒーローはこの辺りで現れるはずだよな」

やがて奇声が止み、踊りも終わると今度は一斉にひざまずき彼女に祈り始めた。

すると先頭にいる長老らしき人物が立ち上がり、そばに控えていた者が松明を渡すのを見た彼女は最後の抵抗をしたが、それは叶わず長老が松明を台の下に押し込んだ。

その火はパチパチと燃え移りながら煙を出し、風に煽られるたびに大きな力を生んだ。

「なんのための生贄なんだ？」俺は少女に手を翳す長老に聞いたよ。

長老は俺を見ると驚いて腰を抜かした。

失礼だよな、そりゃイケメンではないけど標準だと思っていたから。

俺は彼女を縛っている手足のひもをサバイバルナイフで切ると彼女は喜びを表すように俺に抱きついてきたよ。

まだ中学生くらいだ、ひどいことするよね。

原住民たちは俺の行動を信じられないと言った感じで天に向かって奇声を上げている。しかし男衆は槍を構え俺を逃がすまいと一斉に穴を取り囲んだ。

「ちょっと待て、言葉分かる人いないか？」

もちろん通じるわけないよ、分かっていたさ。時間稼ぎってやつだ、だってその先の事は全く考えてなかったからね。

とりあえず俺は長老に彼女を譲れという仕草を試してみた、もちろんタダで。

すると長老は俺の持っているサバイバルナイフをよこせと言ってき

た。

「これと彼女を？」

そうだと云わんばかりによこせという。

「仕方ないな、強欲じじいめ」俺は仕方なくサバイバルナイフを渡した。

するとだいぶ気に入ったのか何やら話し合っている。まあ、仕草で大体の事は分かったけど、要は試してみたいんだろ？ 切れ味を「ちよつと待て！ その前に聞け！」俺は彼女の親族がいないか確認した。

彼女にもそれを仕草で伝える、どうやらこの娘の親族はこの中にいないらしい。

たしかにこここの原住民とは身なりが違う、それなりに服らしいものを着ているし土の化粧なんてしていない。どちらかといえばアンジヨリーナ・ジョリー似だよ、察するにどこその部落からでも捕られて来たのだろう。

「まあ、そういう事なら仕方ないよね・・・天罰ってやつだ」

ややあつて、俺は彼女の先導で密林から逃げ出すと先ほどとは違う火口に向かっていた。

原住民の女たちが俺たちの後を追ってきていたけど、追いつけるわけないよね、とうとう見えなくなつたよ。

ただ、さっきいた場所は燃え広がって大きな黒煙を出していた。

着いた先は火口というより小さな池だ。

近くにクレバスのような割れ目があり、彼女が岩を巧みに捕えながら先に下りていった。

俺はこの高さなら、と飛び下りた。そして彼女が下りてくると驚き

の表情を浮かべ、その高さを何度も確認していた。

俺が小さかった頃はこの程度なら飛び下りていたよ。そんなに驚かなくても、なんて言ってみただけと分かるわけないよね。

そんな俺に彼女は微笑むと岩の隙間に案内してくれた、どうやらここが彼女の住処らしい。

岩伝いに僅かな光を辿って進むとギリギリ俺が通れる大きさの石の階段を下りていった。

真っ暗な闇が辺りを包んでいる、俺は慎重に一步一步階段を下りていった。

少し進むと水が岩を伝いどこかに流れる音が聞こえる。しかしこの反響音からして相当大きな空間であると読んだ。するとその先で松明が出迎えてくれた。

「どうも初めまして」思わずペコリと挨拶してしまった。

その空間には彼女の仲間だろうか、50人ほどが俺を見ている。

彼女は聞きなれない言葉で走って行くとその男に飛びついた、隣には女性と小さな男の子が身を寄せている、彼女の家族だろう。

それから彼女は今までの経緯を皆に話したのだろう、急に歓迎ムードになると俺はその人たちに連れられて奥に案内された。

そこにも長老らしき人物が座っていたが先ほどの強欲じじいよりはるかに若い、おそらく俺と近いだろう。

その若い長老は隣に座るよう勧めてくれた。

俺は多少の遠慮をしつつも腰を下ろす、そしてそれを合図に宴が始まった。

宴といっても差し出されたものは木のコップに入れられたお茶、それに大きな葉に乗せられた水煮芋と焼き魚。

しかしこれが美味しいのなんのって、摘まれたばかりのお茶はその木

のコップとの香りの相乗効果で深い香りを出し、芋はねっとり通常に糖分を多く含んだものだ。焼き魚は文句の付けようがない、職人レベルの焼き加減だ。感心しつつ木のコップを角度を変えて見てみる、熱い湯でここまでの香りを引き出せるとは・・・俺のいる時代ならこの香木のコップは数十万で取り引きされるよ。

彼女は俺の前に座ると何かを言っている。手を合わせている所を見ると礼をいつているのだろう。俺も同じく食事をありがとう、と手を合わせ礼をした。

宴はしばらく続き、やがて眠くなった俺が欠伸をすると長老が気を使ってくれたのか離れた部屋にある岩のベッドに案内された。俺は遠慮なく、と礼をすると横になり目を瞑った。

俺は夢を見ていたよ。

そう、さおりんとちよつとエッチなことをしている夢を。病院でのあの出来事は俺の記憶の最前列に並び、俺という人間が死ぬ時までその位置を動く事はないだろう。

やさしく顔を近づけ熱い吐息を交互に感じながら腕はその腰にまわる、そうして彼女は俺の上に・・・
「ちよつ！？ まった！」俺はあわてて彼女を離れた。

彼女は戸惑いつつも再び身を寄せてくる、どうやら俺と関係を結べとでも言われたのだろう。

身振り手振りですそれはダメだよ、と説得をしてみるがそんな事にはお構いなしといった感じで寄ってくる。

「分かった、分かったから落ち着いて」
俺は彼女の頭を両手で優しく包むと、とりあえず納得したようだった。

「どうすればいい・・・」

笑ってごまかすと俺は正座をして向き直った。すると彼女もそれを真似た。

「かわいい・・・」

ダメだ、ダメだと自分を納得させると、ふと思い当たった。

「手を出して」

彼女にそう仕草をさせるとその上にあのピンクの石を置いた。

彼女はそれをとびきりの笑顔で受け取ると何度も俺に礼をした。

「シーツ！」

彼女はそれを理解したのか大きく頷くと同じ仕草をして見せた。

「やっぱりかわいい・・・」俺はその笑顔に満たされてしまったよ。

落ち着きを戻した俺は横になると彼女を腕枕してそのまま眠りに落ちていった。

彼女は大事そうにそのピンクの石を両手でしっかりと握っていた。

俺は日の出を海岸で迎えていた。

皆が寝ているなかをまだ日が昇らないうちに別れも告げずに出てきていた。

「こんな世界も悪くないな・・・」岩に腰かけながら黄昏ている。すると突然、森にいた鳥が一斉に飛び立ち始めた。

「松本晃！」

突然呼ばれた俺が振り返るとそこには5人の者が立ち、俺を見ていた。

そう、紛れもないあのステロイドビルダー、化け物だ。

彼らはすでに攻撃態勢だ、とにかく怒りの表情を浮かべている。その中心にいる化け物の背は抜きんでている。

「さて、どういう事だ!？」

「貴様が洞窟より持ち出したものを返せ！」

「洞窟!？ 何のことだ！」

「とぼけるな！ ピンク色の石だ！」

化け物たちは真面に取り合うつもりは無いらしい、殺気を感じる。

「さてさて、そんなものは知らない、その前に教えてくれ！ いたいここは何処なんだ!？」

俺の言う事には聞く耳持たずといった感じで近づいてくると囲まれた。後ろは海だし逃げ場は無い。

「この場で渡さなければ殺す！」 さあ渡せと言い寄る。

もうだめだとその時は思ったね、恐らく1対1でも勝てないよ。そんな化け物が5人もいる。

「俺の人生短かったな・・・」

「そう決めるのはまだ早いんじゃない？」 その声はまたしても背後から聞こえたよ。

「ミラ・・・」

「私のこと知っているの？」

「そりゃ、有名人ですから・・・」

「うれしい、お礼に手伝ってあげるね！」

ミラは近くで見ると筋肉質でしなやかな体のラインをしている。

顔は小さく整っているし俗に美人っていう種類の人間だ。

しかし今日の服装はこの間とは違っている。

そう、銀色のあの金属繊維のような素材で出来ている体にピッタリのボディ スーツだ。

「松本晃さん、あなたに会うのは初めてね。という事はこの間の戦いに参加していたという事かしら？」

「はい、でも情けないことに崖から落ちてそのまま意識を失ってしまつて・・・気がついたらここにいたという訳です」

「まあ、強運の持ち主っていうことかしら？」

「そうかもしれないね」

俺はミラの目から背けることなく話をしていたら化け物たちがさらに近づいてきた。

「余裕だな、ミラ」長身の化け物が言う。

「そうでもないわ、さすがにあなたたち5人を相手に勝ち目はないもの」

「そうか、なら石を渡せ」

「石！？ この間もそんなこと言うやつがいたわね、お仕置きしてあげただけ」

「今日は話し合つつもりは無い、この場で渡さなければ貴様も道連れだ！」

「だから、知らないものは知らないの！」ミラが感情を表に出すと顔色が変わった。

さすがに俺はどうしていいか分からなくなっていたよ、だってミラの顔が化け物に近いものになつていたのである。

「そうか、なら仕方ない！」

いきなり3人の化け物はミラに飛び掛かってきた。が、ミラは後ろに飛ぶと海に消えた。

「気を付ける！」指揮をしている長身の化け物が叫んだ。

「俺を殺す気か・・・」

俺は長身の化け物の隣にいた奴にサバイバルナイフを背後から突き刺していた、それは貫通し放電していた。

「これであいつも成仏できるだろう」サバイバルナイフを抜くとそいつは倒れ、俺はジャージを脱いだ。

俺の手足には伸縮可能な武器が取り付けられている。そう、あの中国人らしき人からちやつかり拝借していた。

「あんたらに黒い石は効かないらしいが元は人間だ。俺はご先祖様だぞ、丁重に敬え」言いながら自然と構えをとる。

「ふざけた奴だ、いいだろう。俺が直々に相手をしてやる、お前らはミラを殺せ！」長身の化け物は砂浜に来いという、俺は受けて立つことにした。

ミラに向かって行った3人は海に飛び込み潜り始めた。それを確認すると長身の化け物は俺と対峙し、構えをとった。

「楽しませてくれよ」奴がニヤツとした瞬間、右腕が伸びてきた。

俺は横に飛んで逃れたが伸びた奴の手は砂浜に打ち込まれ、それを軸にゴムが縮むように至近距離をとる。俺は咄嗟に足の武器を伸ばし後方に逃れた。

「いいもの持っているじゃないか・・・」

「そうだろ？ なんなら売ってやってもいいぞ」

「どこまでもふざけた奴だ」

互いに構えをとり直し対峙した時だった、海から3人の化け物が投げ出され俺と奴の間に転がってきた。

「3人がかりは卑怯よ、そう思うでしょ？」言いながらミラが海中から現れた。

この3人をどうやったらかここまで手玉にとれるのか、聞きたいところではあったが、それはすぐに解けた。

ミラの手足はタコの触手のように幾つも海中に伸びている、胴から上が少女のままだ。

その触手を従えると高さを増し俺や化け物を見下ろした、ゆうに5mを超えている。

「姿を現したな、ミラ！」長身の化け物は既に俺との戦いを忘れミラの動向に神経を張り巡らせている。

投げ飛ばされた3人は傷を負いながらもなんとか立ち上がっている、しかしまとともに戦える状態ではない。

3人とも口から血を流し、ひどく締め付けられた様な痕からはとめどなくこちらにも血が流れている。

「あなた達にもう用は無いの、残念だけどここで消えていただくわ！」ミラはそう言つとさらに触手の数を増やした。

吸盤は大きく伸び縮みを繰り返しそれぞれが意思を持ったように呼吸しているようだ。

しかし、俺には1つの疑問があった・・・

「ちょっとまってくれ！ミラ、あんたもこいつらと同じ仲間ではないのか!？」

その言葉に長身の化け物が反応した。

「そうか、お前は何も知らないのだな・・・」

俺の質問にミラは「ギア、死ぬ前に説明してあげなよ、待っていてあげるから」そう言うのと体を徐々に縮め、人間の姿になると俺のそばに寄ってきた。長身の化け物はギアという名で呼ばれているらしい。

「数千年後の話だから信じてても信じなくてもどちらでもいいわよ
それから長身の化け物は話し始めた・・・

「我らの住む世界は、既に人間を超越した者達が支配する世界だ。
松本晃、お前たちの住む世界からはおそらく想像すらできないだろう。

人間が数千年後、ある1部の特殊な能力、細胞を持った人間が数千年の時を経てこの私のような力を持ち、進化していくのだ。それは人間だけではない、自然界のあらゆるものが生き残りをかけ進化する。松本晃、お前は動物を飼ったことがあるか？」

「・・・昔、犬を飼っていた」

「そうか、例えばその犬が数千年後、我々の世界では言葉を使い、人間と同じように進化を遂げている」

「犬がしゃべるのか!？」

「そうだ、我々は尊敬の念を持ち、彼らを獣人と呼ぶ」
「獣人!？」

俺の目をジッと見つめ、間を置くと神妙な顔つきになった。

「それから、そこにいるミラ。お前のような、生まれながらの悪人を悪魔の使い、魔人と呼ぶ」

「魔人つて・・・」

「酷い言い方よね、私のことを魔人扱いするのよ」ミラは笑みを浮

かべながら腕を組んだ。

「そこにいるミラを中心とした組織、魔人衆と我々は呼んでいるが、魔人衆の目的を知った我々がミラの抹殺に選ばれた」

「抹殺って、どういうことだ!？」

「松本晃、お前が以前、我々が創りだした世界で体験したことを覚えてるな？」

「体験って、さおりんがいた世界・・・」

「そうだ、我々の世界には異次元の世界を行き来できる特別な能力を持った人間がいる。その彼女の助けを借り、我々は特別な細胞、ミラよ、お前の遺伝子にも組み込まれている好戦細胞を利用し、お前好みの戦いの場をつくり誘い出すことにした。そして我々の目論見通り見事に現れてくれたという訳だ」

ミラはフツと笑う。

「勘違いしないで、そんなことは初めから知っていたわよ」

俺は2人の会話に割り込んだ。

「ちよつと待って、彼女って!？」

ギアはそんな俺に対して少し焦らしながら答えた。

「夏喜紗織だ」

「夏喜紗織は人類の最高傑作と言ってもいいだろう。異次元の世界を創り出せるばかりではなく、その好戦細胞をも持ち、我らの世界では神の細胞を持つ選ばれた者として崇められている唯一無二の存在だ」

「さおりんが!？」

「さおりんという呼び方は失礼だ。殺されても文句は言えんぞ」

マジな顔でギアは俺を見つめる。俺はそれをかわすため手を振って続けた。

「まった、なんとなく話は分かるが・・・なんで俺を巻き込む？
あんた達からしたら、とてもじゃないがこの世界では簡単に殺され
てしまうよ」

ギアはそうだと、頷いた。

「たしかに・・・だがお前は生き残っている。その意味が分かるか
？」

「分かるわけ、ないでしょ・・・」

ギアは俺に指を差し、含んだ目でゆっくりミラに移した。

「運が良かった・・・なんて思うなよ。そこにいるミラの計画にお
前が必要なだけだ」

「計画！？」俺は隣にいるミラに目をやった。

「聞きたい？」ミラはジッと俺の目を見る。

「えっ、ああ・・・」ここまで聞いておいて聞きたくないとは言え
るわけではないよ。

「あの化け物たちが私達を抹殺しようとするものだから、私達には
身を守る必要があったの」

化け物って・・・ミラ、あんたもでしょ。

「それで時代を遡り、あなた達の時代でも興味深い資料を見つ
けたわ」

「資料？」

「そう、サタンという者の存在を」

「それって神話の・・・」

「神話？ それは違うわ。太古の昔に父である神との戦いに敗れた
息子【サタン】は存在するの、ただ神の手によってこの地球に落と
され永遠に封印されてしまった」

「ちょっと待って!? それが本当ならそのサタンを復活させよう
と!?!」

「そついう事よ」

そこにギアが割り込んできた。

「ミラたち魔人衆はサタンを復活させ、その力でこの世界を我が物
とするためにここにやってきた。そしてその時が刻一刻と迫ってき
ている」

「迫っているって、タイマーでもかけてあるの?」

俺の発言にどうしようもないやつだと言わんばかりにその場の者達
がため息をついた。

「今の発言は無かったことに・・・」

「そこにいるミラが封印を解けることを知ったのだ、その時とはミ
ラが封印を解除する時のことだ」

「あなたが持つているピンクの石、あれが必要なのよ」ミラは俺の
顔を覗きこんだ。

「えっ!? いや、あれは・・・」原住民の女の子にあげてしま
いました、とはとても言えない。

「それに生贄として、まだ純粋な人間の血が必要なの」

「生贄!?!」

「松本晃、これで理解しただろう。そこにいるミラは生贄の為に
前を生かしておいたという訳だ!」

ミラは俺の背後からその触手を伸ばすと俺を巻きつけた。

「ミラ! なにを!?!」

「大事な体だから私が守ってあげる」言い終える頃には少女の面影
は無く、化け物と化していた。

俺は緩やかに締め付けられながらも叫んだ。

「待て！ 俺なんかの血は不味いから役に立たないよ！」
ミラは俺の言葉には微塵の反応もせず巨体化していった。

「ギア様！」 瀕死の化け物たちがギアに身を寄せる。

「もう、あなた達がいくら抵抗しても無駄よ！ 死にたいのならば
かっつけてくればいいわ！」

ミラは無数の手足を数本伸ばし、化け物たちを威嚇して見せた。し
かしギアたちは下がるだけで、もはや抵抗すらできないようだ。

「さあ、新しい主を迎えにいっくわよ！」 ミラは俺をその触手で巻き
抱えながら森に入ってしまった。

「ギア様、これでは……」

「……隙を見て松本晃を奪い、殺す。そうすればサタンの復活は
止められる！」

「確かに」

「これが我々の最後の戦いとなるだろう、我らの命を懸けて必ずサ
タン復活を阻止する！」

4人の化け物たちは大きく頷くとギアを先頭にミラの後を追って行
った。

「ミラ、何処に連れて行く気だ!？」

俺はタコの腕に巻かれながら何度も聞いたが返事がない、そのまま
森を抜けると火山の麓まで来た。

そこには大きな滝、そして滝壺があり、まさかとは思ったがミラは
俺の事を気にも留めずその滝壺に迷うことなく飛び込んだ。

その滝壺の底に着くとミラは小さな穴に向かって触手を伸ばす、し

つかりと穴を掴むとその穴へ体を滑り込ませた。

(息が・・・！)

俺の息が切れる頃、ようやく空気のある洞窟に出ると俺を下ろした。

「さあ、石を渡して」少女の姿になったミラが手を差し出した。

いや、ちよつと待つてと俺が言うと腕だけを触手に変え威嚇してきた。

「ちよつと待つた！ 俺が必要なんだろ！？ だったら1つだけ教えてくれ」

「いいわ、言ってみなさい」

「さおりん・・・には、もう会えないのかな」これだけはどうしても聞いておきたかった。

「そんなことか、お前が夏喜紗織に会う事は2度とない」

「なぜ!?!」

「夏喜紗織の能力はすでに失われているからだ」

「失われているって、どういう・・・」

「そのままの意味だ。異世界への移動、特殊能力、その力の全てを奪われてしまっている」

「そんな、誰がそんなことを!?!」

「そこまでは知らん。さあ、石を渡せ!」ミラは再び巨大な化け物に姿を変えた、今度は容赦するつもりは無いらしい。

「そうか・・・もう会えないのか」

「あの世で会えるだろう」ミラは笑って言った。

「俺の気持ちを分かってたまるか・・・」下腹部に熱いものを感じたよ、怒りつてやつだ。

「分かった、どのみち俺は死ぬ運命だからな。石を渡すよ」

「そうだ、それでいい!」

俺はグツと石を握りしめた。

「受け取れ!」俺は思いつきり明後日の方に石を投げた。

さつきミラに下ろされたときに保険をかけ、似たような大きさの石を拾っておいた。

「そんなことをしても無駄だ」ミラはすかさず触手を伸ばすと、その石を掴んだ。

しかし俺はすでに走り出している、しっかりと赤外線スコープを装着して・・・

「つまらんことを! 私から逃げられると思っているのか!」ミラはその触手を伸ばしシルシルと岩を伝って追いかけてくる。

ただ陸上の逃げ足に関しては俺の方が少し早かったようだ、軽々と岩から岩へ飛び移りながら気づくとミラが離れていった。

しかしそこまでだった、この洞窟は行き止まりになっている。

ミラはそれを知っていたのだろう。あわてる様子も無く追いついてきた。

「残念だわ、もうどこにも逃げられないわね」

たしかにミラの言うとおりだ、さあどうするか・・・すると岩の影にちいさな顔が覗いていた。

その子の手がこつち、こつちと手招きをする。あの原住民の彼女だ。彼女を見て俺は頷く、すると彼女はスツ、と消えた。どうやら抜け穴らしい。

俺は躊躇せずその穴目掛けて走り、頭から飛び込んだ。

「助かった!」

俺はその先の薄っすらとした光を見てホッとした。が、それもつかの間、俺の足をミラの触手が掴んだ。

俺は岩にしがみ付きながら抵抗するが触手は2本、3本と巻き付き引きずり戻す。

「キモイんだよ！」放電したサバイバルナイフでまとめて切ってた。

ようやく彼女に追いつくと大きな空間に出た。彼女は穴から出た俺に再びこっち、こっちと手招きをする。

なるほど、彼女はどうやら地下の住人らしい。

そこは言うなれば地下にある日比谷野音のようだ、祭壇に向かって下降している。

そしてその祭壇には石の棺が置いてある。

周囲には松明が焚かれ地面には見慣れない文字のようなものが全体に彫られている。

彼女と俺はその祭壇に近づき石の棺に目を向けた。

良く見れば棺というより長方形の石の塊だ、左右の先端は丸みを帯びている。蓋のようなものは無い。しかしそこには小さな窪みが中心にあり、その窪みから石の棺全体に螺旋の溝がぐるぐると左右の先端に向かって彫られている。

俺はその螺旋の溝を触ってみた。

「ツルツルだよ・・・」

するとそこに長老が俺を待っていたかのように仲間を引き連れ、岩の階段を下り現れた。

「どうして？」

俺の問いに分からない言葉で返してきた、だがなんとなく理解は出来る。

彼女がその石を差し出して見せてくれた。彼女にあげたピンクの石、あれはこの土地に何らかの形で受け継がれてきたものらしい。それ

を取り返してくれた事への感謝を俺に言っているようだった。

（ すまない、それを盗ったのもこの俺なんだ。この石を守るために ）

俺は手を合わせ、深く礼をして返した。すると皆が叫び声を上げた。どうしたのか、と頭を起こし皆が見ている方に視線を向けると、ミラが石もろともその触手で少女を巻きつけ持ち上げていた。

「ミラ、やめろ！」俺は届くはずのない手を伸ばした。

「ようやく見つけたよ、この娘に感謝しないとね」そう言うと彼女から石を奪い取った。

「そう、これよ。この石」ミラは顔に近づけ角度を変えながら見回した。

「ミラ、その子は関係ない、離してくれ！」

「そういう訳にはいかないわ、松本晃。あなたに逃げられては困るから」そう言うと彼女を後ろに遠ざけた。

「分かった、言うことを聞く。だから離してやってくれ！」

「最初からそうしていればよかったのよ。ではその棺の前に立ちなさい」

俺は警戒しながらも言われた通りにした。するとミラの触手が伸びてくるとピンクの石を棺の窪みにはめた。

それは寸分違わずしっかり固定されると光を生み棺全体に掘られていく螺旋の溝を伝った。

長老をはじめ、人々はそれを見るや、ひれ伏して祈りを捧げはじめた。

「なにが起きるんだ!？」

それを確認すると続けてミラが言った。

「松本晃、その石に触れなさい！」有無を言わせぬ強い口調だ、サタン復活が近づきミラは興奮も混じり息が荒い。

「これに触れるとどうなる！？ ミラ、お前の望む世界が来るのか！？」

「そうだ、さあ石に触れる！ さもないとこの娘を殺す！」ミラは俺に彼女を近づけ早く触れろ、と急かす。

俺にはこの状況を打開する策や力は無い、言われるまま左手で石に触れた。

「これでいいか・・・」

俺が石に触れた瞬間、まるで接着剤のようにくっつくのと離れなくなつた、するとミラはその触手で俺の腕を切りつけた。俺の腕から血が流れ、ピンクの石を伝い棺に彫られている螺旋の溝を伝っていった。

それが全体に流れ終わるとスツと光を失い、元の石の塊に戻ってしまった。ただ、ピンクの石はまだ光を失ってはいない。

「何故だ！？ なぜ！」

ミラは本体の顔を棺に寄せると交互に俺の顔を見た。俺はその顔に圧倒され思わず後ろに下がった。すると接着していた手は何事も無かつたかのように離れた。腕は切られてはいるが無事だ。

「松本晃、お前人間ではないな！」ミラは怒りに身を震わせていた。

「何を言っている、俺は人間だぞ！」それしか言いようがない。

「嘘をつくな！ 純粋な人間ならこれでサタン様は復活されるはずなのだ！」

「俺が化け物だっというのか、俺は純粋な人間だ！」

「こいつ!」ミラはどうしたのかと考えたようだが何か思い当たったようだ。

「・・・そうか、純粋な人間・・・処女だ!」

「なんだと!?!」

ミラは突然、彼女を石の棺の上に持つてくると躊躇することなくその胸を貫いた。

「やめろー!」俺の叫びはその空間に空しくこだました。

「そう、純粋な人間の血とは処女の血・・・」ミラの目はすでに人のモノではなかった。

彼女の腹から大量の血が流れそれは棺を飲み込んだ。

すると棺は息を吹き返したように螺旋の光を回しながら垂直に持ち上がり3mほどの宙で静止した。

「さあ、復活の時!」

ミラが叫びながら触手でその高さに体を持ち上げると、その棺があった場所に彼女を置いた。

「ごめんな! ごめんな! 俺のせいであんなことに・・・許してくれ・・・!」俺は必死に声を絞り出し彼女にすがりよるとその体を抱き寄せた。

そんな俺の姿には目もくれず、ミラの触手が無造作に暴れ興奮の極みを迎えている。

「さあ、我が主よ! その姿を現したまえ!」

すると、そのミラに答えるように棺がはじけ飛んだ。

その中から姿を現したのは裸の人間、長身だがきゃしゃな姿の男だ

った。

彼は宙に浮いたままうなだれている。

「おお・・・我が主よ！ この日をどれだけ待ちわびたことでしょう・・・」ミラは感激のあまり涙を流している。

その姿を俺は見あげた。そしてその目が開くと目が合った。すると彼は突然、大きく手を広げ声にならない叫び声を上げた。その声は大地を揺り動かし、眠れる闇の住人を呼び起こす。

「遅かったか！」ギアたち4人が現れたのはその声が止んでからだった。

長老たちはサタンの叫び声が終わると同時に逃げ出しはじめた。だが俺が抱きかかえる彼女から家族は離れようとはしなかった。

「ああ、サタン様・・・」ミラはサタンに近づくとその足に口づけをした。

「・・・人間、その姿・・・」ボソボソと呟いたサタンはいきなりミラの首を掴み持ち上げた。

「サタン様、なにを!?!」

ミラの触手がサタンに巻きつきだすと、サタンはそれを興味深そうに見ていた。が、ニヤツとすると口を広げミラを中に入れる、上半身まで口の中に入ったミラは抵抗していた。

「サタン様、おやめください！ 私はあなたの忠実なしもべです！」サタンはそうか、という顔をする。胸から噛みちぎった。するとミラの触手は人間の手足に戻り、やがてそれも飲み込んでしまった。

するとサタンの胸についていたピンクの石が光り出した。

サタンが次に目を付けたのはギアたちだった。

ミラを飲み込んだ後、一息入れるとその手を伸ばす。それはミラの触手に姿を変えギアたちに襲いかかった。

ギアは何とかそれをかわしたが傷を負った3人は触手につかまり、ミラと同じに食われていった。

すると今度は俺の方に目を向け、触手を伸ばしてきた。

俺は逃げずに彼女を抱きかかえながら立ち上がった。

「お前だけは許さん！」

すると触手は近づいては来たが、彼女の血の匂いを確認しただけで、それはギアに向けられた。

ギアは果敢にも戦いを挑んだ。

全身に力を込めると走り出し、跳躍した。その高さはサタンを超えている。

サタンは抵抗せず真上を見ている、そこにギアが飛びついた。ギアは躊躇せずサタンの顔にかぶりつくと食いちぎり投げ捨てた。

するとサタンの首から黒い煙がとめどなく溢れてくる。それは噴火するように吹き出すと地上を抜けた。

「があっ！」

視線をギアに戻すと煙に巻かれながらサタンの体に吸収され始めている。

俺たちはただその目の前の状況を見ている事しかできなかった。

やがてギアはサタンの体内に取り込まれ、完全に吸収されてしまった。

黒い煙の噴火が収まると、サタンの首は宙を舞い元の位置に落ち着

いた。

サタンは両手で首の動きを確かめ、スーッと息を吸い込むと再び目を開けた。

「父なる神よ、この世界はとうとう私のものになったのだ」ゆっくりと月光の穴を見上げ両手を上げる。

そして再び俺を見た。

「弱きものよ、我がしもべとなれ」その問いの意味するところ、断れば死ぬだけだ。

だが、俺は俺でない者がその問いに答えた。

『創世記の悪魔サタンよ、そなたがここより出事は無い！』

「我がしもべを断るといっか」

『いつの時代も悪が栄えた試しなし！』

「ならば我が身となりて永遠に使えよ」サタンは再び触手を無数に出しはじめた。

俺は彼女を母親に預け、その場を離れた。

《松本晃》

《ああ、分かっている》

《俺はこの命と引き換えに奴を未来永劫、封印する。奴が2度と地上に現れる事はないだろう》

《それでいいのか》

《これが我が一族、唯一の望みだ》

《そうか、ならば俺はそのための母体となるう》

《すまない、巻き込んでしまった。最後まで迷惑をかける》

《いや、俺と引き換えに彼女を救えるなら本望だ。感謝する》

《できることならお前の望みを叶えてやりたかったが》

《いいさ、あの世で会える》

《短い付き合いだったけど、お前のいた時代は俺に最高のプレゼントをしてくれたよ》

《そうか、次に会う時は科学者としてのあんたを見てみたい》

《ああ、見れるさ》

すでに触手が俺の体を巻き込んでいる。そしてサタンの待つ宙に持ち上げられた。

そしてサタンがその口を大きく開けた時、光を放つ俺の体から別れ出た金属繊維が逆にサタンに巻きつく。

さらにその体内に溶け込み始めるとサタンは金縛りにあったように身動き取れなくなり、うめき声を上げた。

そしてサタンの胸についていたピンクの石が金属繊維によって外されると俺の手に渡った。

《では、いくぞ！》

《ああ！》俺は両手を広げた。

《サタンよ、俺からのプレゼントだ、受け取れ！》

最終奥義！

はああ！

曼荼羅封印！

サタンの体が俺と同じ形をとらされる、やがて同じ光を放ち、互い

の体に曼荼羅が浮かび上がった。
すると2人の中心に黄金の光を放つ者が現れた。
その神々しい御方がサタンと俺の胸に手を入れると、その御方に引き寄せられて1つの光を成した。
サタンはその力を最大限に引き出し抵抗したが、ミラとギア達の力のみを得た状態では、その御方には太刀打ちできない。そしてサタンはそれを理解すると力を抜いた。

「アジアの神よ、いずれこの借りは必ず返す。覚えておくがいい！」
サタンが最後にその御方に言い放った。

俺にはその御方がサタンにやさしく微笑んだように見えた。
そしてその御方が俺の頭の中に話しかけてきた・・・

【今までのあなたの罪は全て許しましょう。さあ、彼女に手を差し伸べてあげなさい】

俺の体から一筋の光が伸びると彼女のその胸にピンクの石が埋め込まれた。

すると彼女の傷は徐々に塞がっていき、頬が赤みを増していく。
やがて彼女は目を開けた。そしてその御方は彼女に声をかけられた。

【私の力は永遠ではありません。いつの日かこの封印が解かれることもあるかもしれませんが。その時はあなた方が再び力を合わせるのです。それは個人の力では無く仲間たちの絆の力によって行いなさい。そのための約束を私と結びましょう】

そう言うとその御方がこの空間に10の石の棺を打ち立てられた。
それはその御方の差し出す光によって線を結び、弓の形を成した。

【私の役目はここまでです。さあ、石を】

すると彼女が起き上がった、驚いたことに彼女の背には翼があり、その翼を羽ばたかせると宙を舞い、中心にある石の棺の手前に着地した。そして彼女が手を差し出し、その石の棺に触れるとその手から光の矢が生まれた。

【さあ、天使よ。心から祈るのです】

彼女は目を瞑り、祈りを捧げた。そして祈りを終わると俺にその笑顔を見せてくれた。

《ではまたな、松本晃》

《ああ、最後に彼女の笑顔が見ることが出来た。ありがとう》

彼女はその石から手を離れた。

それにより光の矢が放たれると俺たちを包んでいた光に吸い込まれ、それは再び大きな石の棺となり祭壇の上に置かれた。

するとその祭壇が大きな音を立てながら地下に下りていく。

同時にその場が崩れ始めると彼女は家族を連れ月光の穴から飛び出していった……。

追記

東京の国立図書館・・・深夜。

施設されている図書館の中に白いコートを着た男が分厚い本を広げている。そこに黒いコートを着た男が近づいてきた。

「嬉しそうだな」

「はい、松本晃を追って来たかいました。やはりこの時代で、全てと言っていいほど封印術が完成されています」

「それはサタンに通用するものか？」

「はい、ただしそれには条件があります」

「条件とは？」

白いコートの男はその分厚い本を閉じると笑みを見せた。

「たいしたものではありませんよ」

黒いコートの男はさすがだ、という感じで言った。

「そうか、我が国の頭脳がそういうのだ、なにも問題ないだろう」

都内の病院・・・

相変わらず病院で寝ていた俺は早朝、起こされた。

「松本さくん、採血の時間です」

「はい？ 今日もですか？」

「明日、退院でしょ。最後の検査ですよ」

「分かりました、ってイタタ！」相変わらず下手だよ、この人。この間は間違えて筋肉に注射するし。

結局、俺は重い病気や、ましてガンなどではなかった。

細胞がどうたらこうたら言っていたが俺には何のことかさっぱり分

からなかったよ。

次の日の昼ごろ、両親と一緒に病院を出た。先生は俺にもう来るんじゃないぞと、送り出してくれた。

「よかったね、何処も悪いところが無くて」

「そうだな」

両親は俺がガンで死ぬことを考えていたようだったから、この日はかりは心底ホツとしていた。

「ごめん、だいぶ心配かけたみたいで……」俺は立ち止って頭を下げた。

「まあ、この子だったら……こんなことする子では無かったのにな、あなた」

「そうだな、どこの良い子だ？」

「御2人の子ですよ」俺は遠慮のない笑顔で答えた。

「そうか、そうだろうな」

「そうですよ」両親は満面の笑みで答える。

「どっかで飯でも食っていくか？」父が俺の肩を抱き寄せながら言う、こんなことをされるのはちょっと照れくさいが俺も肩に手を回す。

「今日はコース料理でもどう？」

「ああ、任せる」

「父さん、ちよっと背が縮んだんじゃない？」

「言ってくれるな、まだまだお前には負けんぞ！」

楽しそうに帰っていく親子を先生と看護師が手を振って見送った。

「先生、結局松本さんて・・・何で入院していたんですか？」

「私にも良く分からないけど、製薬会社の御偉いさんがサンプルを欲しがっていたみたいだけど・・・」

「サンプル？ ですか」

「ひょっとして恐ろしい細胞でも持っていたりしてね・・・」

「ちよっと先生ったら〜」

「冗談だよ！」

「先生、朝っぱらからそんなところでいちゃつかないでくれよ」

あのじいさんも見送りに来てくれていた。

「すいません、では血圧から計りましようね」

「ああ、お願いしますよ」

夏喜紗織の住む世界・・・

「紗織、どうだ調子は？」

「ぜんぜん、心配いりませんよ〜」

「そうか」

「もう、パパは心配し過ぎよ〜」

さおりんの視線の先に広大な海が広がっている。ここは大陸から離れた所にある島だ。

そして山の中腹に建てられている城の見晴台に父と一時の安らぎを迎えていた。

そこに慌ただしく兵士が駆けこんできた。

「將軍、海岸より魔人衆が現れました！」

「そうか、すぐ行く！」

「はっ！」慌ただしく兵は階段を駆け下りていった。

「では行ってくる」

「はい、頑張つてね！」

父はニヤツとすると近衛兵を引き連れて戦に向かった。

「おじいちゃんは心配性でしゅね〜」さおりんはお腹を摩りながら微笑んでいた。

「姫様〜！」ハアハアと息を切らしながら駆け寄ってくる巨体があった。

「どうしたの、獣ちゃん？」さおりんは首をかしげる。

「あの・・・姫・・・いい加減、その獣っちゃんって呼び方やめて頂けませんか・・・」白髪頭の大きな熊の獣人が座り込んだ。そして改めて聞き直す。「どうしたのは、私のセリフです。姫が私を御呼びになったのでしょうか？」

「あ、そうだった」

「も〜 勘弁してください」

「そうそう獣ちゃんにお願いがあったの〜」

「はいはい、今日はなんでしょうか」

「この子の名前を一緒に考えて」

「私が・・・ですか!?!」

「そうよ〜」

熊の獣人はビシツと立ち上がると胸に手を当てた。

「はっ！ 光栄でございます！」

「でね〜 オラルっていう名前にしたんだけど〜 どうかな？」

「……いま一緒に考えるって」

城の回りではすでに戦いが始まっていた。

魔人衆は海を渡り攻撃を加えてきていたようだが、さおりんの父が率いるは過去に化け物と呼ばれていた者たちだ、という事は化け物同士が戦っている。

さおりんたちは今や人間を助け、獣人と協力しながら魔人衆と戦っている。

「さあ、オラルちゃん。ばあちゃんの所にいこうね」「さおりんはお腹を摩りながら城に入っていた。

この戦いはすでに1000年もの昔から続けられているのだ。
この時代もやはり争いは終わりを迎えることなく続いていた……

完

封印編（後書き）

最後までご覧いただき、ありがとうございました。

この物語は「オラル創世記」という位置づけで始めた「8月32日」
です。

話の続きは、どうぞ「ルードシアの守り人〜黒?〜」本編でお楽し
みください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2826z/>

「8月32日」 覚醒編 ~ 封印編

2012年1月6日16時50分発行